ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告110

富山市内遺跡発掘調査概要23

—北代遺跡　呉羽富田町遺跡—

2023

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 110

富山市内遺跡発掘調査概要 23

—北代遺跡　呉羽富田町遺跡—

２０２３

富山市教育委員会

『富山市内遺跡発掘調査概要 23』正誤表

頁／修正項目	誤	正
p10／上から 2 行目	粘土採掘坑群（第 13 図、写真図版 1～3）	粘土採掘坑群（第 8～14 図、写真図版 1～3）
上から 15 行目	土坑が断り合っている	土坑が切り合っている
p12／セクション箇所	SX03d-d′	SX03c-c″
	SX03e-e′	SX03d-d′
P79／北代遺跡 主な遺構（弥生）	溝なし	なし

例　言

1　本書は、個人住宅建築に先立ち実施した北代遺跡・呉羽富田町遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。
3　本書で報告する遺跡の概要は次のとおりである。

＜北代遺跡＞

遺跡所在地	富山市北代地内	調査面積	１６９㎡
発掘調査期間	平成１５年２月２５日～３月３１日		
整理調査期間	平成１５年４月１日～令和５年３月３１日		
担当者(現地)	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	学芸員	原田幸子
	同	嘱託	安達志津
(整理)	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	主幹学芸員	近藤顕子
	同	会計年度任用職員	納屋内高史

＜呉羽富田町遺跡＞

遺跡所在地	富山市北代地内	調査面積	４２㎡
発掘調査期間	令和４年３月８日～３月１８日		
整理調査期間	令和４年３月１９日～令和５年３月３１日		
担当者(現地)	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	専門学芸員	堀内大介
	同	学芸員	泉田侑希
	同	会計年度任用職員	納屋内高史
			三上智丈
			増田　豊
(整理)	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	専門学芸員	堀内大介

4　本書の執筆は、第１章を近藤・堀内、第２章を堀内、第３章第１～２節を近藤、第３～４節を納屋内、第６節を近藤・納屋内、第４章を堀内が行った。文責は文末に示した。編集は納屋内が行った。
5　本書の自然科学分析は株式会社加速器分析研究所に委託し、第３章第５節、第４章第５節にその結果を掲載した。
6　現地調査から報告書作成にあたり、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。
　北代町内会、有限会社坂東設備
7　出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。方位は真北、水平水準は海抜高である。
2　遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず１からの通し番号を付した。
　SB（掘立柱建物）　SD（溝）　SK（土坑）　SI（竪穴建物）　SP（ピット）　SX（不明遺構）
3　土層、遺物観察表の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
4　挿図中の網掛けは次のとおりである。
　赤彩　黒色　煤・油煙
5　参考文献は第５章の後にまとめた。ただし、自然科学分析は各分析の末尾に掲載した。
6　本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。
　教育委員会→教委　　(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所→富山県財団
7　第２・３・３１図は、富山市基本図をもとに作成した。

目　次

例言・凡例

第１章　調査の経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
北代遺跡の経過 …… 1
呉羽富田町遺跡の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　北代遺跡 …… 6
第１節　調査の方法 …… 6
第２節　層　序 …… 6
第３節　遺　構 …… 6
第４節　遺　物 …… 30
第５節　自然科学分析 …… 46
第６節　総　括 …… 49
写真図版

第４章　呉羽富田町遺跡 …… 63
第１節　調査の方法 …… 63
第２節　層　序 …… 63
第３節　遺　構 …… 63
第４節　遺　物 …… 66
第５節　自然科学分析 …… 70
第６節　総　括 …… 72
写真図版

引用・参考文献 …… 77

報告書抄録

図　目　次

第１図　遺跡周辺の地質 ・・・ 3
第２図　周辺の遺跡分布図(1/25,000) ・・・ 5
第３図　北代遺跡調査区位置図(1/5,000) ・・・ 6
第４図　北代遺跡の基本層序 ・・・ 6
第５図　北代遺跡遺構平面図（下層）(1/100) ・・・ 7
第６図　北代遺跡遺構平面図（中層）(1/100) ・・・ 8
第７図　北代遺跡遺構平面図（上層）(1/100) ・・・ 9
第８図　粘土採掘坑群SX03および周辺遺構平面図(1/50) ・・・ 11
第９図　粘土採掘坑群SX03および周辺遺構断面図(1/50) ・・・ 12
第10図　粘土採掘坑群SX04および周辺遺構平面図(1/50) ・・・ 13
第11図　粘土採掘坑群SX04および周辺遺構断面図(1/50) ・・・ 14
第12図　粘土採掘坑SX03-04南北セクションおよびSX04-SK28エレベーション図(1/50) ・・・ 15
第13図　粘土採掘坑群SX07および周辺遺構平面・断面図(1/50) ・・・ 16
第14図　SI01　1期建物および関連遺構平面・断面図(1/50) ・・・ 18
第15図　SI01　2期建物および関連遺構平面図(1/50) ・・・ 21
第16図　SI01　2期建物および関連遺構断面図(1/50) ・・・ 22
第17図　SI01　3期建物および周辺遺構平面・断面図および北壁セクション図(1/50) ・・・ 23
第18図　SB01および周辺遺構平面・断面図・エレベーション図(1/50) ・・・ 24
第19図　SB02および周辺遺構平面・断面図・エレベーション図(1/50) ・・・ 25
第20図　北代遺跡出土遺物実測図(1) ・・・ 31
第21図　北代遺跡出土遺物実測図(2) ・・・ 32
第22図　北代遺跡出土遺物実測図(3) ・・・ 33
第23図　北代遺跡出土遺物実測図(4) ・・・ 35
第24図　北代遺跡出土遺物実測図(5) ・・・ 36
第25図　北代遺跡出土遺物実測図(6) ・・・ 37
第26図　北代遺跡出土遺物実測図(7) ・・・ 38
第27図　北代遺跡出土遺物実測図(8) ・・・ 39
第28図　北代遺跡出土遺物実測図(9) ・・・ 40
第29図　北代遺跡の縄文時代の粘土採掘坑 ・・・ 49
第30図　北代遺跡の古代の遺構 ・・・ 51
第31図　呉羽富田町遺跡調査区位置図(1/5,000) ・・・ 63
第32図　呉羽富田町遺跡の基本層序 ・・・ 63
第33図　呉羽富田町遺跡遺構平面図(1/100) ・・・ 64
第34図　呉羽富田町遺跡遺構断面図(1/40) ・・・ 65
第35図　呉羽富田町遺跡出土遺物実測図(1) ・・・ 68
第36図　呉羽富田町遺跡出土遺物実測図(2) ・・・ 69
第37図　平成13年度調査区と令和3年度調査区全体図 ・・・ 72

表　目　次

第１表　北代遺跡検出遺構観察表(1) ・・・ 27
第２表　北代遺跡検出遺構観察表(2) ・・・ 28
第３表　北代遺跡出土遺物観察表(3) ・・・ 29
第４表　北代遺跡出土遺物観察表(1) ・・・ 41
第５表　北代遺跡出土遺物観察表(2) ・・・ 42
第６表　北代遺跡出土遺物観察表(3) ・・・ 43
第７表　北代遺跡出土遺物観察表(4) ・・・ 44
第８表　北代遺跡出土遺物観察表(5) ・・・ 45
第９表　県内及び県外の主な縄文時代の粘土採掘坑 ・・・ 50
第10表　呉羽富田町遺跡出土遺物観察表 ・・・ 67

図版目次

〈北代遺跡〉
写真図版１　調査区全景・遺構(1)
写真図版２　遺構(2)
写真図版３　遺構(3)
写真図版４　遺構(4)
写真図版５　遺構(5)
写真図版６　遺構(6)
写真図版７　遺物(1)
写真図版８　遺物(2)
写真図版９　遺物(3)
写真図版10　遺物(4)
写真図版11　遺物(5)
〈呉羽富田町遺跡〉
写真図版12　遺構(1)
写真図版13　遺構(2)
写真図版14　調査区遠景・遺物(1)
写真図版15　遺物(2)

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

北代遺跡の経緯　北代遺跡は、明治時代以来土器や石器が多く出土する遺跡として知られ、県内考古学会の草分けである早川荘作氏をはじめとして多くの研究者が訪れた。昭和 46 年に住宅開発が計画されたため県・市が試掘調査を行い、東西 280 m南北 200 mの範囲に竪穴住居跡 46 棟が発見され、縄文時代中期の大集落遺跡であることが明らかになった。昭和 59 年１月４日には、北陸の縄文中期集落構造の解明できる貴重な遺跡として史跡指定を受け、その後指定地 12,155 ㎡を公有化した。公有地化した範囲を史跡、それ以外は埋蔵文化財包蔵地として取り扱っている。昭和 51 年刊行『富山市遺跡地図』に「北代遺跡」（市 No. 25）として、平成 13 年刊行『富山市遺跡地図（改訂版）』には「北代遺跡」（市 No. 200207）として登載した。遺跡面積は約 34,500 ㎡である。

平成 14 年７月 30 日、富山市北代地内の当該地において個人住宅建築に伴う埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。建設予定地全域 349.88 ㎡ が埋蔵文化財包蔵地の北代遺跡に含まれており、平成 13 年度に実施した隣接地の発掘調査で縄文時代の粘土採掘穴が確認され、その延長が建設予定地に及んでいることから、平成 14 年 12 月 18 日に埋蔵文化財の取り扱いについて工事主体者と協議を行った。住宅建築にかかる造成で切土による整地を実施するため、遺跡の保護層を越えて掘削されることから、切土範囲 169 ㎡について記録保存のための発掘調査を行うこととなった。それ以外の遺跡所在範囲は現状保存とした。

文化財保護法 57 条第２項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、施主から平成 14 年 12 月 24 日付けで市教委へ提出され、市教委の副申を付けて平成 14 年 12 月 25 日付け埋文第 172 号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法 98 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、市教委から平成 15 年２月 18 日付け埋文第 172 号により富山県教育委員会へ提出した。

２月 25 日から発掘調査を開始した。同日に工事主体者側から建築範囲を示してもらい、調査範囲の設定を行い、２月 26 日にバックホウによる表土掘削を行った。表土掘削途中において、表土掘削が完了した場所から、順次作業員による遺構検出作業を行った。表土掘削・遺構検出が完了した範囲から遺構掘削に入り、掘削を終えたものから順次、平面図・断面図を作成した。測量は日本測地系に拠り、トータルステーションを用いて行った。３月 31 日に調査を完了した。

発掘作業と並行して平成 15 年３月 31 日まで基礎整理として出土遺物の洗浄・注記を行った。本格的な整理作業は平成 31 年２月 19 日から開始した。遺構平面図・断面図のデジタルトレースは、平成 30 年度に株式会社アーキジオ富山本社が北代遺跡遺構測量図デジタルトレース図作成業務委託、令和４年度に株式会社アーキジオ富山本社が北代遺跡遺構断面実測図デジタルトレース業務委託として実施した。

出土品整理業務は、現地調査終了後から令和５年３月まで埋蔵文化財センターにおいて行った。直営で進めるとともに、一部の遺物の実測、写真撮影について令和元年度に有限会社毛野考古学研究所、令和２年度に株式会社アーキジオ富山本社が北代遺跡出土品整理業務委託として実施し、令和４年度には北陸航測株式会社が北代遺跡出土品実測図デジタルトレース業務委託としてデジタルトレースを行った。放射性炭素年代測定は平成 31 年度に株式会社加速器分析研究所に北代遺跡発掘調査自然科学分析業務として実施し、その成果は本書第３章第５節に掲載している。上記の整理作業と併行して原稿作成を行い、令和５年３月 31 日に本書を刊行した。　（近藤）

呉羽富田町遺跡の経緯　呉羽富田町遺跡は、昭和51年刊行『富山市遺跡地図』に「呉羽富田町遺跡」(№20)として登載され、埋蔵文化財包蔵地となった。このとき、遺跡は2地区に分かれた包蔵地(縄文時代中期、古代の散布地)となっていた。昭和63年～平成3年度に実施した分布調査の結果を受け、年代や遺跡の性格を見直し、遺跡範囲を修正し、平成5年刊行『富山市遺跡地図(改訂版)』に「呉羽富田町遺跡」(№201160)として登載された。

そのときの修正内容は、遺跡北西端の墓地には通称「シャクドジ」と呼ばれる寺院跡の伝承があり、五輪塔・板碑が存在するため、新たに「北代シャクドジ遺跡」(№201159)として切り離した。また分布調査の結果、一般県道四方新中茶屋線の東側にも遺跡が広がることが確認され、県道の東にあった「谷野呉山病院遺跡」(№23)、「北代B遺跡」(№24)は「呉羽富田町遺跡」に統合した。平成25年刊行『富山市遺跡地図』には、遺跡番号を№2010182に変更して登載された。現在の埋蔵文化財包蔵地面積40,000㎡である。

昭和52年、遺跡北西部において宅地造成工事が計画され発掘調査を実施した。平安時代前期(9世紀前半～中頃)の竪穴建物4棟を検出し、縄文時代中期の縄文土器・石器、縄文時代晩期の縄文土器、平安時代前期の須恵器・土師器・土錘が出土した(富山市教委1978)。

平成13年、遺跡北東部において個人住宅建築工事が計画され発掘調査を実施した。奈良時代後半～平安時代前期(8世紀後半～9世紀)の掘立柱建物3棟を検出し、須恵器・土師器・鉄製品・鉄滓が出土した(富山市教委2012a)。

令和3年9月16日、当該地において個人住宅建築に伴い、埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地459㎡全域が埋蔵文化財包蔵地に含まれており、10月7日に試掘調査を実施した。その結果、調査対象範囲全域459㎡で古代の柱穴、土坑、谷地形等を検出し、縄文土器、古代の土師器・須恵器、近世磁器が出土した。

工事対象範囲全域で埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財の保護措置について工事主体者と協議した。その結果、住宅の工事計画のうち、住宅基礎工事および下水道管布設工事が遺構面まで到達するため、埋蔵文化財を現地で保存できないことから、埋蔵文化財所在範囲459㎡のうち42㎡については、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。東側敷地境界の擁壁部分および宅地北側の駐車場部分については、遺構面まで掘削が達しないことから、工事立会を行うこととなった。それ以外の埋蔵文化財所在範囲は現状保存とした。

文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、施主から令和4年3月3日付けで市教育委員会へ提出され、市教委の副申を付けて同日付け埋文182号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、市教育委員会から同年3月11日に富山県教育委員会へ提出した。発掘調査前の3月4日に擁壁部分の工事立会を行った。発掘調査は3月8日から開始した。表土掘削は施主から建築を請け負っていた有限会社坂東設備にご協力いただいき実施した。3月18日に調査を完了し、現地を引き渡した。発掘調査と並行して3月16日に駐車場部分の工事立会を行った。全体平面図作成の測量支援を株式会社エイ・テックに委託し、3月17・18日に現地測量を実施し、3月31日に業務を完了した。

出土品整理業務は、現地調査終了後から令和5年3月まで埋蔵文化財センターにおいて行った。出土遺物を実測した後、出土遺物のデジタルトレースは株式会社エイ・テックに委託して、令和5年2月14日～3月3日の期間に実施した。遺構の年代比定の検討のため、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託して実施し、その成果は本書第3章第5節に掲載している。併行して、原稿作成、遺物写真撮影を行い、令和5年3月31日に本書を刊行した。　(堀内)

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山平野の中央には、南西端の富山市境野新から北東端の富山市八ヶ山までの延長約7kmの呉羽丘陵が南北に縦断している。呉羽山断層によって形成されたと考えられている呉羽丘陵の東側は崖状の急斜面、丘陵西側は緩傾斜面となっている。東側の崖下には、神通川やその支流の井田川が丘陵に沿うように走り、氾濫平野を形成した。丘陵の北西端には北代台地（長岡台地）と呼ばれる標高15～20mの平坦面が広がっている。北代台地には丘陵尾根部分から北西に延びる開析谷が多数存在する。

北代遺跡と呉羽富田町遺跡は、富山市街地から北西約3.5㎞、北代地内に所在する。両遺跡は、北代台地の中位面に立地し、北陸新幹線やあいの風とやま鉄道が通る大きな開析谷を挟んで、北東に北代遺跡、南西に呉羽富田町遺跡が所在する。（堀内）

第１図　遺跡周辺の地質

第２節　歴史的環境

両遺跡周辺の呉羽丘陵・北代台地には、旧石器時代から近世まで様々な遺跡が所在し、古くから遺跡の宝庫として知られている。

旧石器時代は、北代台地の北西山裾にある小竹貝塚ではナイフ形石器が出土している。北代遺跡では、ナイフ形石器と斧形石器が出土している（西井・藤田 1976）。

縄文時代前期には、縄文海進で広がった旧放生津潟の湖畔に貝塚を伴う集落が営まれた。小竹貝塚では、前期中葉～末葉に集落が形成された。集落に隣接する貝塚内に墓域が造られ、縄文時代前期では全国最多の人骨が発見された（富山県財団 2014）。小竹貝塚の東約 750 mに、前期後葉の「蜆ヶ森式土器」の標識遺跡である蜆ヶ森貝塚もある。縄文時代中期に入ると、北代台地上に集落が形成され、代表的な遺跡が国史跡北代遺跡である。高床建物を中心に約 70 棟以上の竪穴住居が取り巻く集落形態を取る（富山市教委 1998）。北代加茂下Ⅲ遺跡では、柱列が二重に巡る 14 本以上の柱を持つ特異な建物を確認した（堀沢 1996・1997）。

縄文時代後・晩期には、北代遺跡や長岡杉林遺跡で集落が営まれる。長岡八町遺跡や百塚遺跡では、大型の土偶、石刀、石棒など祭祀関係遺物が出土した。

弥生時代前期から中期にかけては、神通川左岸下流の打出遺跡などが知られるが、散発的に確認される程度である。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、遺跡数が増加し、神通川流域や呉羽丘陵上に集落や古墳などが作られる。神通川旧河道流域では、右岸に四方荒屋遺跡（戸水Ｂ式～古府クルビ式）、四方背戸割遺跡（戸水Ｂ式～法仏式）、永代割遺跡（猫橋式～古府クルビ式）など、左岸に打出遺跡（法仏式～高畠式）、今市遺跡（月影式）、八町Ⅱ遺跡（高畠式）などの集落遺跡がある。打出遺跡では、畿内との関係の深い三連壺や県内最多の鉄器が出土し、神通川下流域の拠点的集落であったと推測した（富山市教委 2006）。呉羽丘陵の最高峰城山（標高 145 m）の山頂である白

鳥城跡には、弥生時代後期に高地性集落が営まれた。また、丘陵上には多数の墳墓や古墳が造られた。呉羽丘陵北端部には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳等28基を発掘し、「百塚古墳群」の存在を確認した（富山市教委2009・2012b）。百塚古墳群の南西約1㎞には、古墳時代初期の造営とされる杉坂古墳群がある。さらに杉坂古墳群の南南西約0.4㎞に古墳時代前期の円墳と考えられる番神山古墳が発見された（富山市教委2020）。呉羽丘陵南部には、方形周溝墓群が見つかった杉谷A遺跡、山陰地方との交流を示す四隅突出型墳丘墓である杉谷4号墳や前方後方墳である杉谷1番塚古墳を有する杉谷古墳群がある。

古墳時代中期には、呉羽丘陵南部に呉羽山丘陵古墳群や前方後円墳の呉羽塚山古墳などが造られる。

古墳時代後期には、番神山横穴墓群や金屋陣ノ穴横穴墓群などの群集墳が造られる。番神山横穴墓群では、昭和期に発見された15基に加え9基が新たに発見された。B9号墓からは、馬具4点（大型矩形立環状鏡板付轡1、鉸具2、飾金具1）が出土し、上位階級の被葬者の存在が示唆された（富山市教委2022）。百塚遺跡ではこの時期にも円墳が造られ、円墳の周溝内埋葬施設に馬のハミが副葬され、他地域に先んじて馬を所有した有力者がいたと考えられる（富山市教委2013）。

白鳳～平安時代には、呉羽丘陵南西部の西側山裾部において須恵器・土師器の生産が行われている。須恵器生産は、6世紀のセンガリ山窯跡が初現とされ、7世紀後半には、県史跡である金草第一古窯跡で操業される。その後、小竹源平山窯跡や西金屋・古沢窯跡群などで須恵器生産が行われる。土師器生産は、西金屋遺跡や金草電化農場前遺跡などで行われる。呉羽丘陵北西部では、古代射水郡「寒江郷」の存在が推測され、北代遺跡、百塚住吉D遺跡、今市遺跡などがその開墾集落と考えられる。長岡杉林遺跡では、緑釉陶器、灰釉陶器に加え、瓦塔などの仏教遺物も出土し、「寒江郷」の中心的な集落と考えられる（富山市教委1987）。平安時代の道路跡が、今市遺跡（南西－北東方向）、打出遺跡（北西－南東方向）で検出し、両遺跡の間で交わると推定した（富山市教委2013）。また、呉羽山を越える直線道路遺構として、呉羽山古道の存在が確認された（西井・小林2005）。

中世になると、神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩瀬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的な性格が考えられている（中世岩瀬湊調査研究グループ2004）。八町Ⅱ遺跡では、鎌倉時代～室町時代集落を確認し、区画溝や多数の井戸が検出し、千鳥紋を施した漆器なども出土することから京都下鴨神社領「寒江荘」の中核的な集落と考えられている（富山市教委2008）。越中守護代神保氏の被官であった国人寺嶋氏の出自の地と推測されている今市遺跡内の寺島地区において、薬研堀や土橋、犬走りなどの館跡とされる遺構を確認し、鎌倉時代にはこの地に有力者の館が存在することが明らかとなった（富山市教委2011）。城山山頂には、白鳥城跡が築かれた。富山市教育委員会による3次にわたる調査で、主郭から建物に付随する石組溝や鍛冶遺構、空堀跡などの16世紀代の遺構を検出した（富山市教委1981・1983・1984）。これらは、主に天正13（1585）年豊臣秀吉が富山城主佐々成政攻めの際の拠点とした時期の遺構と推定する。千原崎遺跡は、中世末から近世にかけて神通川にかかる渡し場の宿場的な遺跡と考える。

江戸時代には、富山藩主前田家墓所長岡御廟所が造営される。加賀藩より富山藩10万石を与えられた前田利次は、立藩の際に百塚の地に新城を造ることを願い出て許可をされ、「百塚侍従」と呼ばれた。しかし、百塚築城は財政的に叶わず、二代正甫が亡父の念願であった百塚城予定地近くに利次を葬り、以後この場所が富山藩歴代藩主の墓所になった（古川・野垣・小林・蓮沼2010）。

（堀内）

1 北代遺跡　2 呉羽富田町遺跡　3 長岡杉林遺跡　4 北代シャクドジ遺跡　5 北代加茂下Ⅲ遺跡　6 長岡八町遺跡　7 蛾ヶ森貝塚
8 小竹貝塚　9 今市遺跡　10 寺島館跡　11 八町Ⅱ遺跡　12 八ヶ山Ａ遺跡　13 百塚住吉Ｄ遺跡　14 百塚住吉遺跡　15 百塚遺跡
16 百塚古墳群　17 富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）　18 杉坂古墳群　19 番神山横穴墓群　20 番神山古墳　21 呉羽山古墳群
22 明神山遺跡　23 大峰城跡　24 白鳥城跡　25 呉羽山古道　26 小竹源平山窯跡　27 呉羽三ツ塚古墳　28 呉羽小竹堤遺跡

第２図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第３章　北代遺跡

第１節　調査の方法

第３図　北代遺跡調査区位置図（1/5,000）

発掘調査区は、個人住宅工事によって遺跡保護層を超えて掘削される範囲である。

発掘作業　表土掘削は、バックホウにより行い、排土は横置きとした。表土掘削が完了した場所から、人力による遺構検出作業を行った。

遺構掘削は移植ゴテ等を使用した。竪穴建物と粘土採掘穴は複数のセクションベルトを設定して掘り下げ、その他の遺構は基本的に半截して掘り下げ、必要に応じて断面図1/20作成と写真撮影を行い、その後完掘した。遺構掘削中に、形状や土層状況から倒木痕や撹乱と認められたものについては完掘を行わなかった。

測量作業　測量基準は日本測地系を使用した。全ての遺構掘削完了後に図化作業を行い、平面図（概略図1/100、詳細図1/40）を作成した。遺構検出時の出土遺物は、トータルステーションによる座標取り上げとした。遺構出土遺物は、出土状況図の作成や座標取り上げにより、出土位置を記録した。写真は、個々の遺構は完掘して順次撮影し、すべての遺構を完掘・清掃後、完掘写真を撮影した。全景写真は斜面部であるため分割して撮影した。撮影は、35㎜判の白黒フィルムとカラーネガフィルムを用いた。粘土採掘坑は遺構の時期を絞り込むため、出土した縄文土器付着の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を実施した。

整理作業　発掘作業終了後に遺物洗浄・注記を行った。その後、報告書刊行までやや期間をおき、平成31～令和4年度に接合・実測から報告書作成までの作業を行った。遺物出土量はコンテナ30箱であるが、現地は芋穴によって広い範囲で攪乱を受けており、攪乱による混入品が多数であるため遺構に伴うと考えられるものを中心に選定した。遺構・遺物実測図はデジタルトレースを行った。遺物写真撮影はデジタルカメラを使用した。

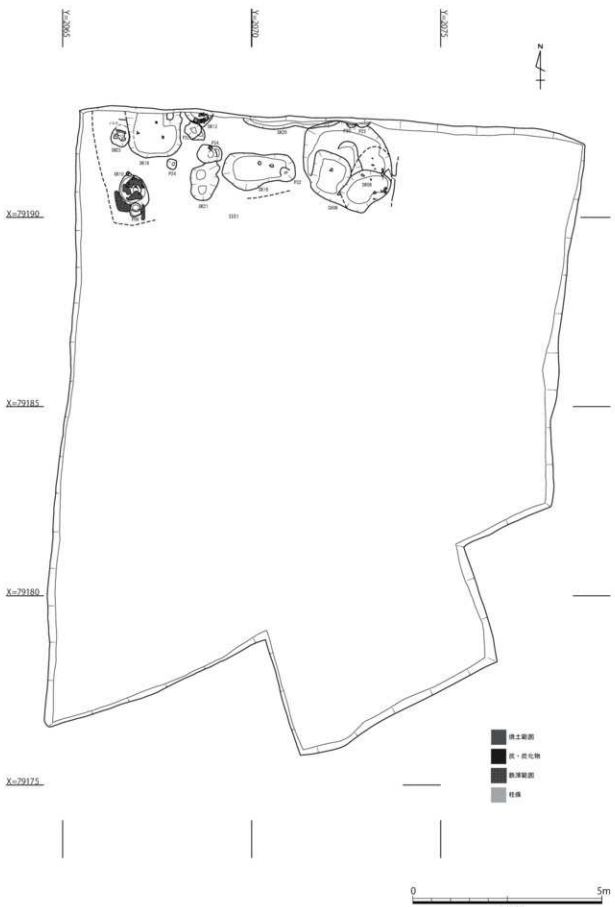
第２節　層序（第４図）

調査区は長岡丘陵上の平坦面から西へ延びる尾根状台地の南側斜面地に立地する。完掘状況での標高は、調査区北側で16.75ｍ、南側で15.25ｍと南北で1.5ｍの比高差がある。調査区北側では、厚さ約25～40㎝の褐色～明褐色の耕作土が堆積し、その下から縄文時代から古代にかけての遺構が検出された。遺構検出面の土色は黄色土である。遺構は北側住居址部分では3面、それ以外の部分では2面にわたって検出されている。

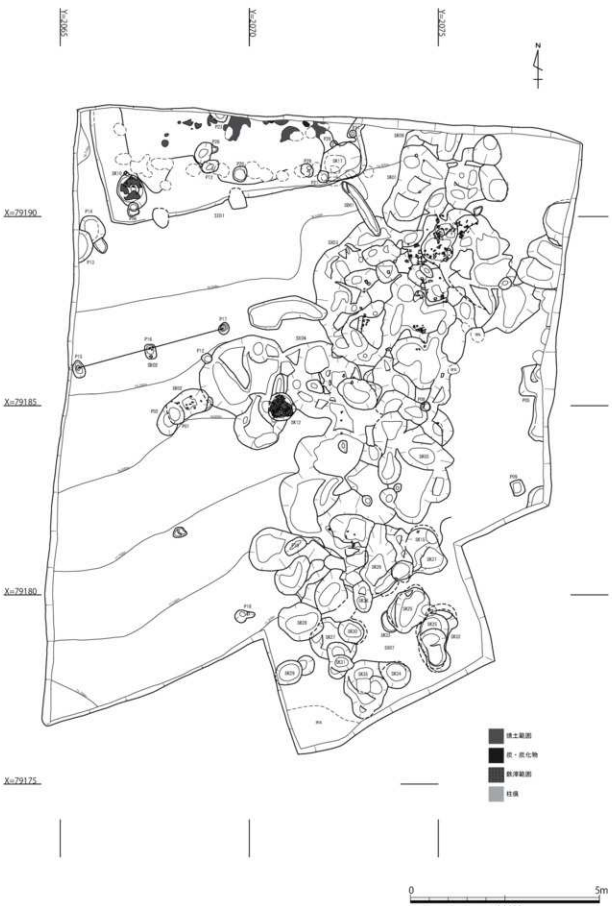
第４図　北代遺跡の基本層序

第３節　遺構

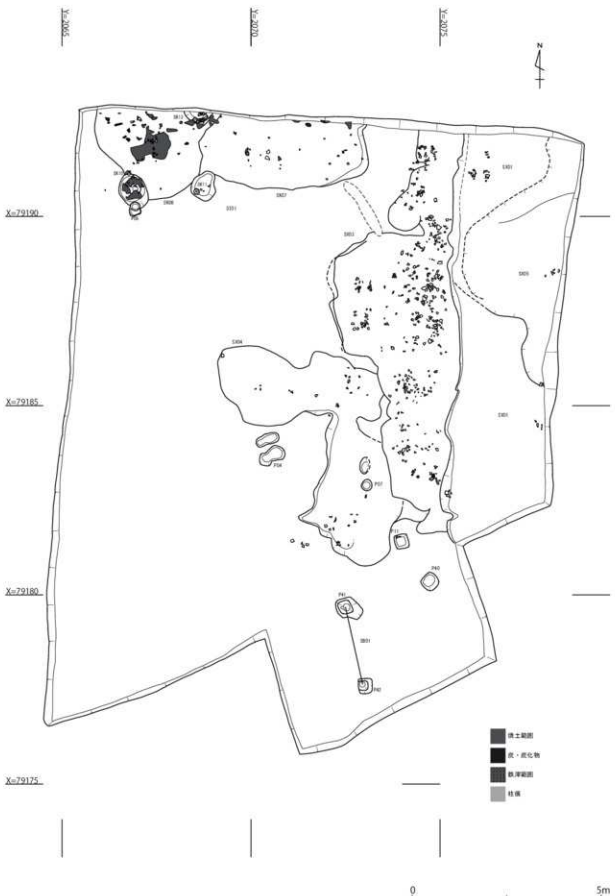
調査は、上層、中層、下層の3面に分けて行われているが、各段階とも縄文時代と古代の遺構が混在する。そのため、ここでは時代ごとに分けて報告する。また、上層のSX01、SX05については堆積状況や断面形状から包含層の掘り残しと考えられるため、報告から除外する。　（近藤）



第 5 図　北代遺跡遺構平面図（下層）(1/100)



第 6 図　北代遺跡遺構平面図（中層）(1/100)



第 7 図　北代遺跡遺構平面図（上層）(1/100)

縄文時代

粘土採掘坑群（第 13 図、写真図版 1 ～ 3）

SK09, SK01, SX03・SK03, SX04, SX07(SK15・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37), SX06: 調査区中央部から東側一帯にわたって検出されている。SK09、SX01、SX03・SK03、SX04、SX07、SX06 の大きく 6 群に分けられるようであり、切り合い関係等から、それらの前後関係は SX06 → SX07 → SX04 → SX03・SK03 → SK01 → SK09 となる様である。各群を構成する土坑の平面形は不整形で底面も複雑な形状を成し、縁辺はオーバーハングしている部分も存在する。埋土は黒褐色～暗褐色土を主体とする土に、黄色土を主体とする土が筋状またはブロック状に多数挟在する。縄文土器、須恵器、土師器、石器、土製品、焼成粘土塊、焼骨、被熱礫が出土している。出土遺物のほとんどを縄文土器が占め、須恵器、土師器については、出土量も少ない上、状態も悪く、芋穴や樹木根による攪乱に伴うと考えられる。そのため、縄文時代の遺構と考えられる。出土した縄文土器は、中期～晩期まで及ぶ。最も多いものは晩期中葉以降の条痕文土器であり、中期末の串田新式がこれに次ぐ。

SX06 は調査区北端中央部、SI01 の下層東側で検出された。2.55 m × 2.25 mの範囲に分布し、最低 4 基の土坑が斬り合っていると考えられる。深さ 0.74 mを計る。SX04 は調査区中央部から東側にかけて検出された。最低 35 基の土坑が切り合っていると考えられる。7.8 m × 6.7 mの範囲に分布し、最も深い部分で深さ約 0.6 mを計る。SX03・SK03 は調査区東側から検出された。10.45 m × 6 mの範囲に分布し、最低 63 基の土坑が切り合っていると考えられる。最も深い部分で深さ約 0.8 mを計る。SX07 は調査時には 14 基の土坑として検出されていたが、埋土の状態等から同一段階の粘土採掘坑と推定される為、1 つの粘土採掘坑群として報告する。SX04 の南端から南へおよそ 5 m四方の範囲に分布する。深さは最も深い所で 0.45 mを計る。

墓または祭祀遺構（第 10 ～ 11 図、写真図版 3）

SK12: 調査区中央付近から検出された。SX04 上に形成されている。平面形は円形で、規模は直径 0.7 m、深さ 0.6 mを計る。内部からは縄文時代晩期終末の壺 1 個体分がまとまって出土し、その上部に焼土が厚く堆積する。焼土層の内部や上面からは、人以外の大型哺乳類と考えられる白色化した焼骨や焼けた骨角器が出土している。土坑内に壺を埋納した後で、その上で火を焚き、骨や骨角器を燃やしたと考えられる。墓または祭祀跡の可能性が考えられるだろう。遺構の時期は出土した壺の年代から、縄文時代晩期終末と推定される。

ピット（第 14 図、写真図版 4）

P24: 調査区北端中央部、SI01 の下層西側から検出された。平面形は方形、規模は 0.26 m × 0.25 m、深さ 0.22 mを計る。縄文土器が出土している。

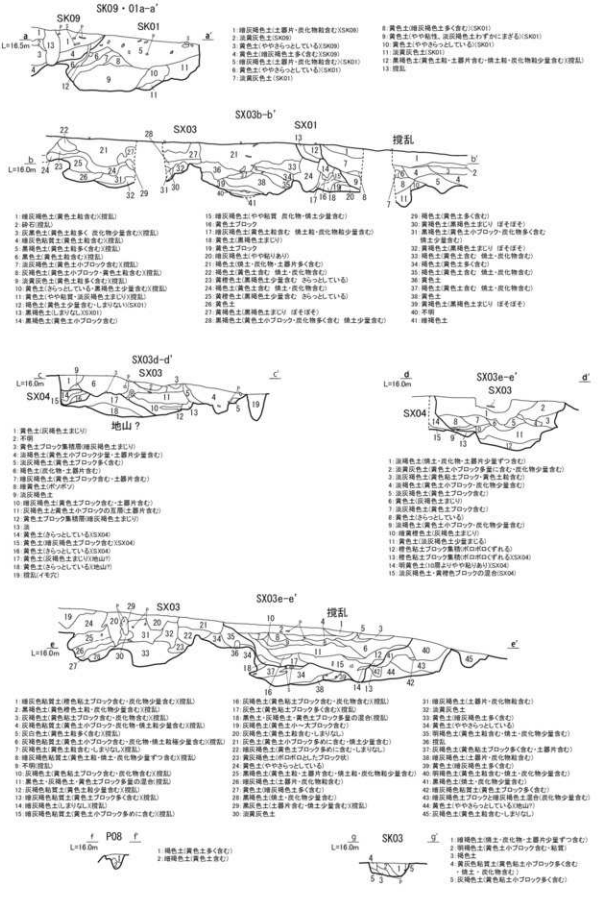
土坑（第 14 ～ 15、19 図、写真図版 3）

P02: 調査区西側中央から検出された。P01 に切られる形で形成されており、平面形は楕円形と考えられる。規模は 0.82 m × 0.54 m、深さ 0.2 mを計る。縄文土器が出土している。

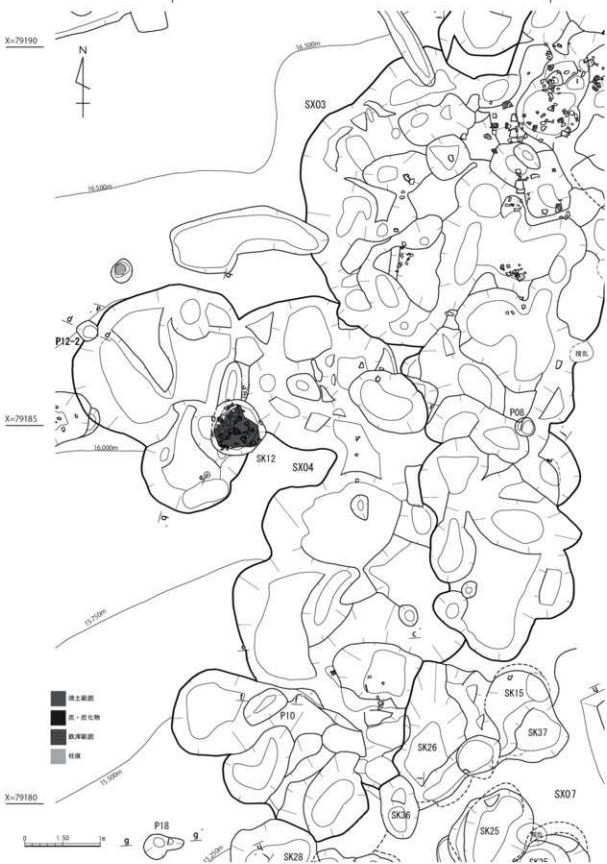
P13: 調査区北西端から検出された。西側半分程度は調査区外へ伸び、平面形は円形を呈すると推定される。規模は直径 0.9 m、深さ 0.28 mを計る。埋土は黄色土ブロックを多量に含み、比較的短期間で埋没したと考えられる。縄文土器が出土している。

P14: 調査区北西端から検出された。南端部が P13 に切られる形で形成されており、平面形は歪な

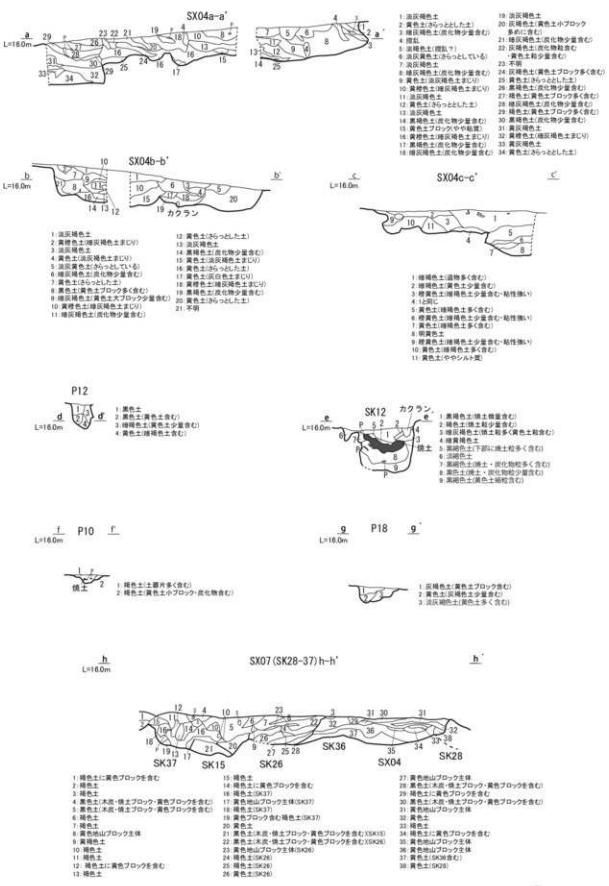
第 8 図　粘土採掘坑群 SX03 および周辺遺構平面図 (1/50)



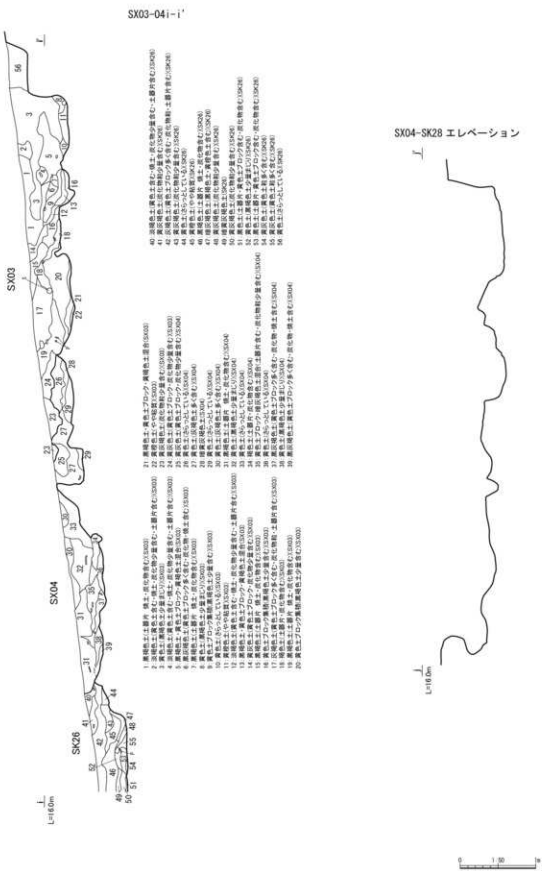
第 9 図　粘土採掘坑群 SX03 および周辺遺構断面図 (1/50)



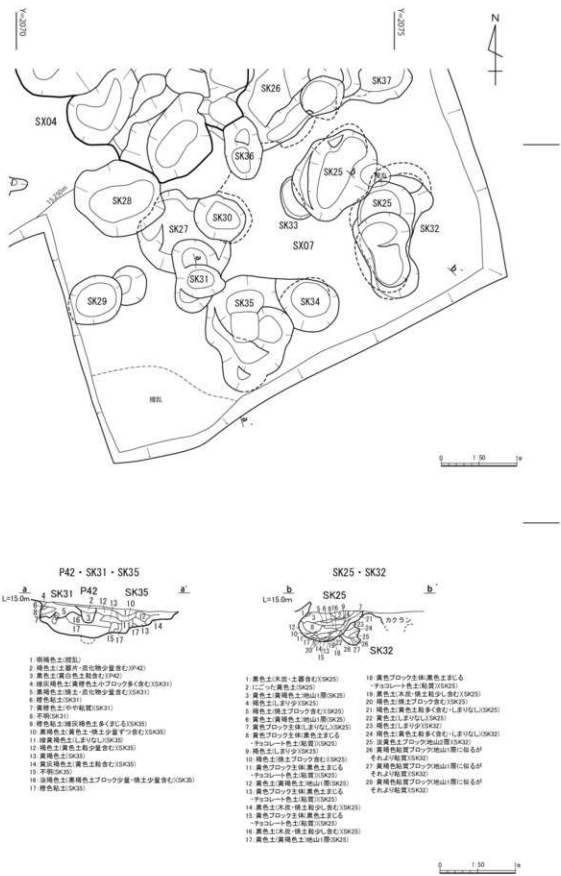
第 10 図　粘土採掘坑群 SX04 および周辺遺構平面図 (1/50)



第 11 図　粘土採掘坑群 SX04 および周辺遺構断面図 (1/50)



第 12 図　粘土採掘坑群 SX03-04 南北セクションおよび SX04-SK28 エレベーション図 (1/50)



第 13 図　粘土採掘坑群 SX07 および周辺遺構平面・断面図 (1/50)

楕円形を呈する。規模は0.75 m×0.7 m、深さ0.08 mを計る。縄文土器、石器が出土している。

SK02：調査区西側中央から検出された。SX04の東端に隣接し、P01に切られる。平面形は東西に長い楕円形を呈し、規模は残存部分で0.7 m×0.95 m、深さ0.3 mを計る。縄文土器が出土している。

SK21：調査区北端中央部、SI01の下層中央付近、SK11の下から検出された。P34に切られ、平面形は歪な長楕円形、規模は1.1 m×0.75 m、深さ0.28 mを計る。縄文土器が出土している。

古代

竪穴建物（第14～17図、写真図版4～6）

SI01（SK06・07）：調査区北端西側から検出された。検出段階ではSK06、07の2つの土坑と認識されていたが、埋土に大きな違いがなく、完掘状況では一つの竪穴建物と認識できるため（第17図）、竪穴建物として報告する。下層から上層にかけて検出されており、下層から順に1期、2期、3期の大きく3時期に分かれる。建物の北側2/3程度は調査区外へ伸びる。埋土からは縄文土器、須恵器、土師器、石器、鉄滓、焼成粘土塊、紡錘車、焼骨、炭化物が出土している。内部には各時期を通じて鍛冶に関連する炉跡と考えられる遺構が形成される他、焼土や炭化物が広範囲に分布し、鍛冶に関連する建物と推定される。ここでは各時期の建物と付随する遺構について、時期ごとに述べる。なお、付随する遺構の内、複数時期にわたるものは検出された最も古い時期の項目で報告する。

1期建物（第14・16～17図、写真図版4～6）

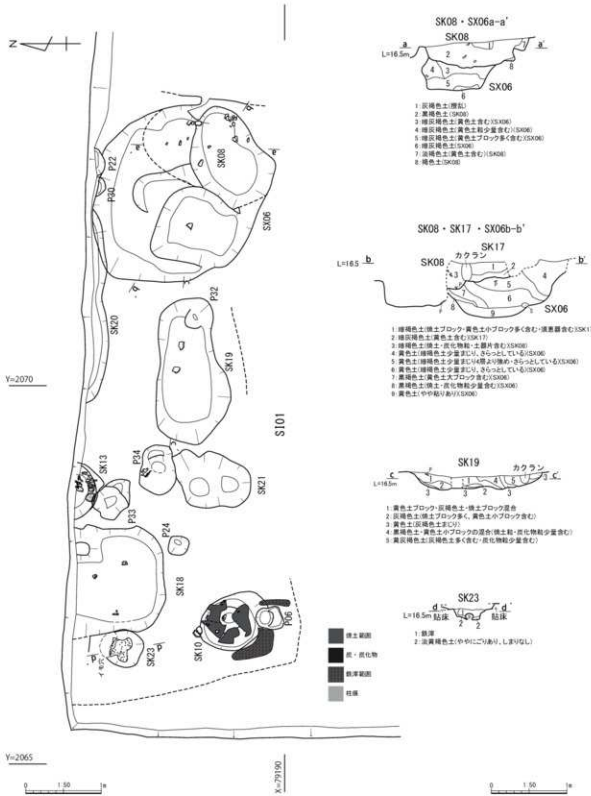
東側の堀方が不明確であるが、方形を呈すると推定される。検出範囲で1辺8.0 m前後を計ると見られる。断面形は浅い盆状で、内部には炉址と考えられるSK10、SK08、SK19が形成される他、土坑が多数形成され、床面の凹凸が激しい。深さは遺構が形成されない部分で0.15 m程度と考えられ、床面直上には2期建物の貼床が形成される。付随する遺構の時期から7世紀後半～8世紀前半のものと考えられる。

SI01-1-SK08：SI01南東隅から検出された。平面形は歪な形状を呈するようで、規模は1.8 m×1.1 m、深さ0.62 mを計る。埋土は黒褐色～暗灰褐色土を主体とし、焼土や炭化物を多く含み、炉址の可能性がある。縄文土器、須恵器、土師器、石器、剥片、焼骨、焼成粘土塊、焼土塊、被熱礫が出土しており、須恵器の年代から7世紀後半のものとみられる。

SI01-1・2・3-SK10：SI01の南西隅から検出された。3期建物の調査時に検出されている。平面形は南北に長い楕円形で、規模は0.95 m×0.75 m、深さ0.28 mを計る。埋土は焼土や焼土塊、炭化物を極多量に含み、1期建物調査面では遺構南側周辺に鉄滓が集中する。そのため、鍛冶に関連する炉跡と考えられ、1期建物段階にあった炉を作り直し、3期建物段階まで使用していたものと推定される。縄文土器、須恵器、焼土塊、被熱礫、炭化物が出土しており、検出状況や出土遺物から7世紀後半～9世紀中頃にかけてのものと考えられる。

SI01-1・2・3-P06：SI01の南西隅から検出された。3期建物の調査時に検出されている。SK10を切る形で検出されており、SK10に関連する遺構の可能性がある。平面形は歪な楕円形で、規模は0.37 m×0.3 m、深さ0.24 mを計る。縄文土器、土師器、鉄滓が出土しており、遺構の切り合い等から時期は7世紀後半～9世紀中頃の可能性がある。

SI01-1-SK19：SI01中央付近から検出された。平面形は細長い歪な形状で、規模は0.97 m×1.93 m、深さ0.24 mを計る。埋土は灰褐色土と黄色土ブロックの混合土を主体とし、焼土や炭化物を多量に含む。鍛冶に関連する炉址の可能性がある。縄文土器、須恵器、土師器、鉄滓、焼成粘土塊、炭化物が出土しており、出土した土師器から7世紀後半～8世紀前半のものと考えられる。



第 14 図　SI01　1 期建物および関連遺構平面・断面図 (1/50)

SI01-1・3-SK13： SI01 の中央付近から検出された。2 期建物の調査時に検出されているが、断面観察の結果、2 期建物の床面付近と 3 期建物の床面から 2 回に渡って掘り込まれている（第 17 図）。土坑の北側半分程度は調査区外へ伸びると推定される。

2 期建物の床面付近から掘り込まれているものは、円形を呈し、規模は直径 0.54 m、深さ 0.2 mを計る。埋土は貼床と同質の黄色土を主体とする土である。縄文土器、須恵器、土師器が出土しており、土師器には P34 出土資料と接合するものがある。出土した須恵器等の年代から 7 世紀後半～ 8 世紀前半と考えられる。年代的に 1 期建物に付随すると考えられる。

3 期建物の床面付近から掘り込まれているものは、形状不明だが、幅 0.66 m、深さ 0.22 mを計る。埋土は焼土や焼土塊を多量に含み、炉などの火所として用いられていたと考えられる。縄文土器、須恵器、土師器が出土しており、出土した須恵器の年代から 8 世紀中頃～ 9 世紀中頃のものと考えられる。

SI01-1-SK23: SI01 西側から検出された。平面形は円形を呈し、直径 0.5 m、深さ 0.7 mを計る。内部には須恵器の小型広口壺が口を下にした状態で置かれ、淡黄褐色土で少し埋めた上で、上から鉄滓が投入されている。鉄滓は埋納された須恵器にも付着していることから、固結していない状態で投入されたと考えられる。鍛冶に関わる祭祀の可能性が考えられる。須恵器の他、縄文土器、土師器、鉄滓が出土しており、出土した須恵器、土師器の年代から、7 世紀後半～ 8 世紀前半と考えられる。

SI01-1-P34： SI01 中央部から検出された。SK21 を切り、平面形は歪な楕円形、規模は 0.5 m× 0.65 m、深さは 0.2 mを計る。土師器が 1 個体分出土しており、SK13 下層出土資料と接合する。出土した土師器の年代から、7 世紀代のものと考えられる。

SI01-1-SK18： SI01 西側から検出された。平面形は方形を呈し、北側は調査区外へ伸びる。規模は検出部分で 1.2 m× 1.45 m、深さは 0.25 mを計る。埋土は SI01 下層建物の貼床と同様な黄色土ブロックを主体とする土であり、床面構築直前まで開口していたと考えられる。縄文土器、石器、石核、鉄滓が出土しており、2 期建物との関係から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

SI01-1-SK20： SI01 中央から東側にかけて検出された。平面形は、検出部分では細長い溝状を呈するが、北側は遺構外へ伸びる。埋土は 2 期建物の貼床と同様な黄色土ブロックを主体とする土であり、床面構築直前まで開口していたと考えられる。縄文土器、土師器が出土しており、2 期建物との関係から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

SI01-1-P22： SI01 東端付近から検出された。平面形は円形を呈するようであり、北側は調査区外へ伸びる。規模は直径 0.37 m、深さ 0.44 mを計る。埋土は、やや暗褐色土が多く混じるものの 2 期建物の貼床と同様な黄色土ブロックを主体とする土であり、床面構築直前まで開口していたと考えられる。縄文土器、須恵器、土師器が出土しており、2 期建物との関係から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

SI01-1-P30： SI01 東端付近から検出された。平面形は円形を呈するようであり、北側は調査区外へ伸びる。規模は直径 0.25 m、深さ 0.24 mを計る。埋土は、やや暗褐色土が多く混じるものの 2 期建物の貼床と同様な黄色土ブロックを主体とする土であり、床面構築直前まで開口していたと考えられる。遺物は出土していないが、2 期建物との関係から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

SI01-1-P32： SI01 の下層南側中央付近から検出された。SK19 南東隅を切る。平面形は円形、規模は直径 0.4 m、深さ 0.33 mを計る。土師器が出土しており、2 期建物との関係から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

2 期建物（第 15 ～ 17 図、写真図版 4 ～ 5）

方形を呈し、検出範囲で 1 辺 7.4 m を計る。断面形は浅い盆状で、深さは西側の方で約 0.1 ～ 0.15 m を計る。床面はおよそ平坦で、内部の約 6 m 四方の範囲に黄色粘土や黄色土ブロックを主体とする貼床を施す。1 期建物内部の遺構の埋土の状態から、貼床は 1 期建物内部の土坑等を埋めながら行われたと考えられる。埋土は東端付近に炭化物を含む褐色土が堆積するものの、それ以外は炭化物や焼土を含む黒褐色土で概ね単層である。内部には炉址と考えられる SK10、SK17 が形成される他、調査区北壁中央付近にも炉址（P23）が形成されるようである。出土遺物や付随する遺構の時期から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-SK17：SI01 の南東端から検出された。平面形は楕円形で、北端と西端に P21 と P28 が形成される。規模は 0.94 m × 1.15 m、深さ 0.1 m を計る。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、炉址の可能性がある。縄文土器、須恵器、土師器、焼土塊、被熱礫、炭化物が出土しており、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-P23：SI01 の中央付近から検出された。平面形は円形を呈するようであり、北側は調査区外へ伸びる。直径 0.45 m、深さ 0.18 m を計る。1 期建物調査時に検出されているが、埋土は焼土を極多量に含み、掘り込み面の直上は 2 期建物の貼床をした上で炉跡が形成されている。そのため、2 期建物に関わる遺構と考えられ、8 世紀前半～中頃のものの可能性がある。焼土塊が出土している。

SI01-2-P12：SI01 の南端中央から検出された。SK11 に切られ、P26 を切る形で形成されている。平面形は楕円形で、規模は 0.33 m × 0.48 m、深さ 0.14 m を計る。縄文土器、土師器が出土しており、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-P20：SI01 の南端中央から検出された。平面形は円形で、規模は 0.4 m × 0.37 m、深さ 0.22 m を計る。縄文土器、須恵器が出土しており、須恵器の年代から 8 世紀中頃のものと考えられる。

SI01-2-P21：SI01 の南東端から検出された。SK17 を切る形で検出されており、平面形は円形で、規模は 0.3 m × 0.28 m、深さ 0.1 m を計る。遺物は出土していないが、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-P26：SI01 の南端中央から検出された。P12 に切られる形で形成されており、平面形は楕円形で、規模は 0.74 m × 0.55 m、深さ 0.13 m を計る。縄文土器、土師器が出土しており、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-P28：SI01 の南東端から検出された。SK17 を切る形で形成されており、平面形は円形で、規模は 0.15 m × 0.2 m、深さ 0.1 m を計る。遺物は出土していないが、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

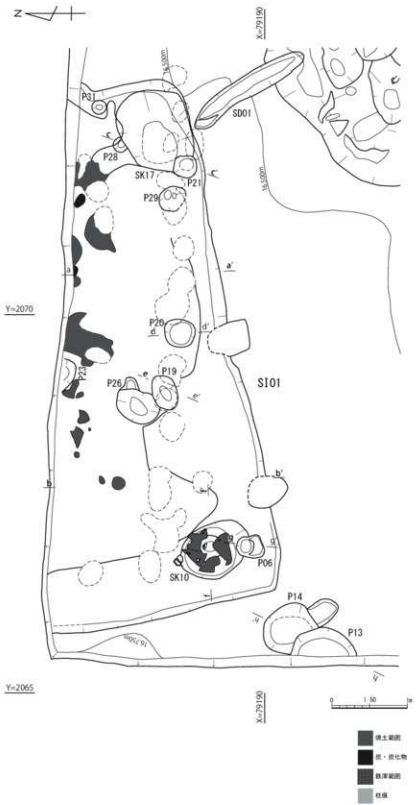
SI01-2-P29：SI01 の南東端から検出された。平面形は円形で、規模は 0.36 m × 0.34 m、深さ 0.36 m を計る。縄文土器、須恵器、鉄滓が出土しており、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

SI01-2-P31：SI01 の南東端から検出された。平面形は円形で、規模は 0.19 m × 0.18 m、深さ 0.13 m を計る。焼土塊が出土しており、遺構の切り合い等から 8 世紀前半～中頃のものと考えられる。

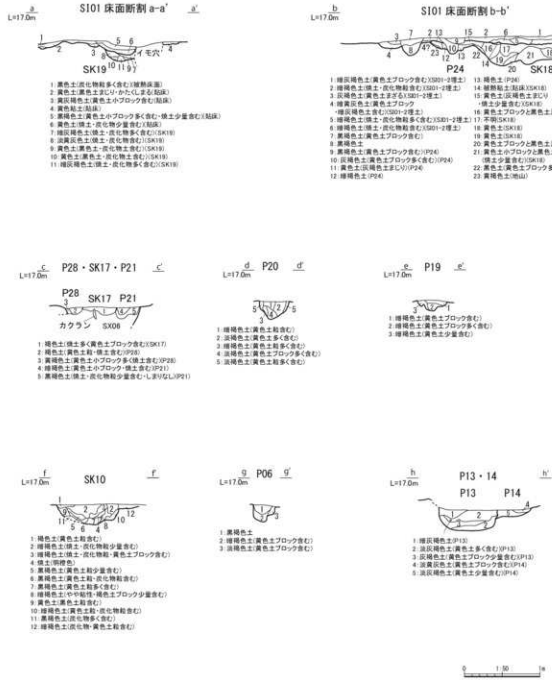
3 期建物（第 17 図、写真図版 6）

歪な方形を呈する様であり、検出範囲で東西約 7 m を計る。断面形は、浅い皿状を呈し、深さは最も深い所で約 0.1 m を計る。埋土は SK06 部分と SK07 部分の 2 つに分けられているが、SK06 部分は暗褐色土、SK07 部分は黒褐色土と、大きな違いは見られない。出土遺物や付随する遺構の時期から 8 世紀中頃～ 9 世紀中頃のものと考えられる。

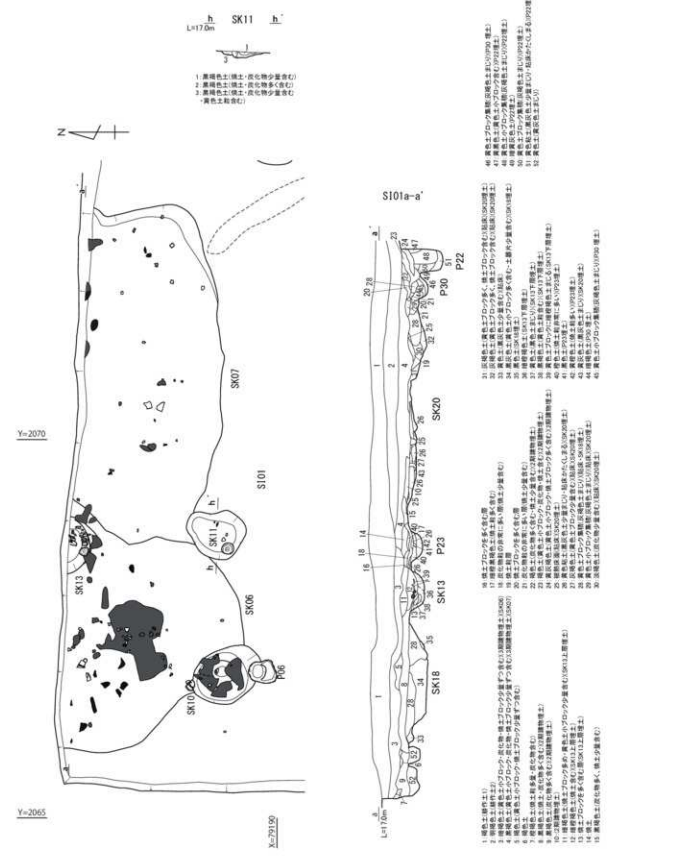
SI01-3-SK11：調査区北端西側、SI01 の南端中央から検出された。平面形は歪な楕円形で、規模は 0.6 m × 0.54 m、深さ 0.1 m を計る。埋土は焼土や焼土塊、炭化物を極多量に含み、鍛冶に関連する炉跡と考えられる。縄文土器、須恵器、鉄滓、炭化物、焼土塊が出土しており、出土した須恵器の時期から 8 世紀中頃のものと考えられる。



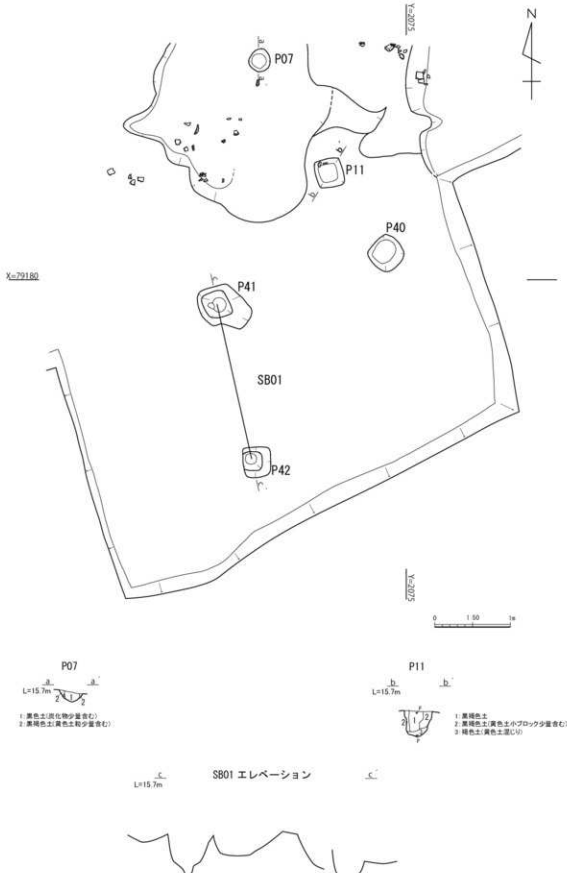
第 15 図　SI01　2 期建物および関連遺構平面図 (1/50)



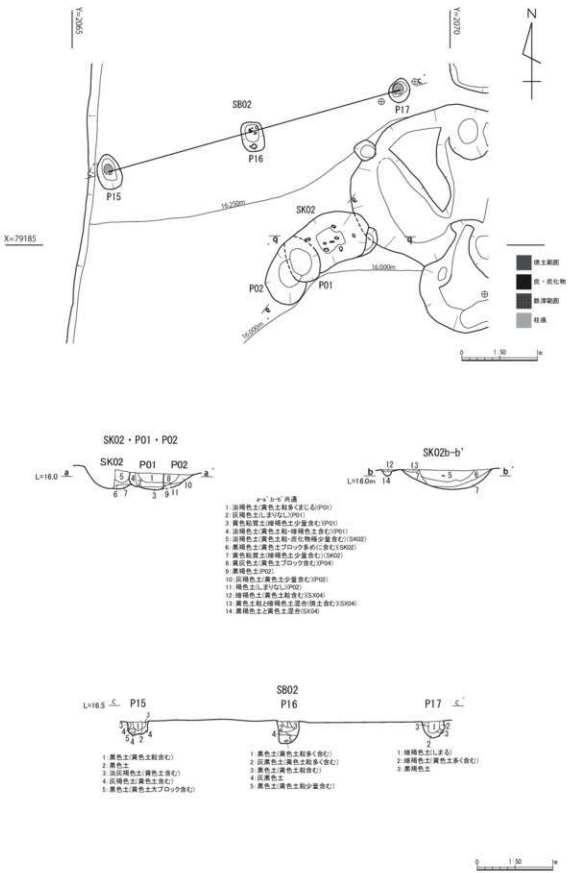
第 16 図　SI01　2 期建物および関連遺構断面図 (1/50)



第17図　SI01　3期建物および周辺遺構平面・断面図および北壁セクション図 (1/50)



第 18 図　SB01 および周辺遺構平面・断面図・エレベーション図 (1/50)



第 19 図　SB02 および周辺遺構平面・断面図・エレベーション図 (1/50)

掘立柱建物（第 18 ～ 19 図、写真図版 6）

SB01： 調査区南部中央付近から検出された。直線的に並ぶ柱穴列が検出されたのみだが、構成する柱穴が比較的大型であることから掘立柱建物と判断した。P41、P42 で構成され、柱間距離は芯心間で約 2 mを測る。柱穴列の方位は N-12.6-W である。構成する各柱穴はすべて方形で、規模は P41 が 0.63 m × 0.67 mで深さ 0.44 m、P42 が 0.4 m × 0.36 mで深さ 0.4 mを計る。出土遺物は、縄文土器、石器、須恵器、土師器、焼成粘土塊、被熱礫が出土している。遺構の年代は P41 から出土した須恵器や柱間距離が隣接する長岡杉林遺跡とおよそ一致することから、奈良・平安時代と考えられる。

SB02： 調査区西側中央付近から検出された。直線的に並ぶ柱穴列が検出されたのみだが、構成する柱穴が比較的大型であることから、掘立柱建物と判断した。P15、P16、P17 で構成され、柱間距離は芯心間で約 2 mを計る。柱穴列の方位は N-74.3-E で SB01 にほぼ直交する。構成する各柱穴は P15 が南北方向に長い楕円形、P16 が南北方向に長い方形、P17 が円形で、規模は P15 が 0.46 m × 0.31 m、深さ 0.2 m、P16 が 0.4 m × 0.3 mで深さ 0.3 m、P17 が直径 0.3 mで深さ 0.2 mを計る。縄文土器、土師器、石器、被熱礫が出土している。土師器の出土や柱間距離が隣接する長岡杉林遺跡で検出された奈良・平安時代の掘立柱建物とおよそ一致することから、奈良・平安時代のものと考えられる。

ピット（第 8・10・18 図）

P07: 調査区南部中央付近から検出された。平面形は円形で、規模は径 0.3 m、深さ 0.13 mを計る。縄文土器、土師器が出土している。

P09: 調査区南東隅から検出された。平面形は方形、規模は 0.4 m × 0.34 m、深さ 0.37 mを計る。縄文土器、土師器、鉄滓、被熱礫が出土している。

P11: 調査区南部中央付近から検出された。平面形は方形で、規模は 0.37 m × 0.36 m、深さ 0.36 mを測る。縄文土器、須恵器、石器、鉄滓、焼土塊が出土している。

P12-2: 調査区西側中央部、SX04 西端から検出された。SX04 を切る形で形成されており、平面形は円形、規模は直径 0.28 m、深さ 0.3 mを計る。縄文土器、土師器が出土している。

P40： 調査区南部中央付近から検出された。SB01 に隣接するが、SB01-P41 とならぶと見た場合、SB01-P41-P42 間に対する直行方向からややずれるほか、柱間距離もやや異なる為、SB01 の一部と見なすことは避けた。平面形は方形で、規模は 0.42 m × 0.44 m、深さ 0.33 mを測る。縄文土器、須恵器が出土している。

土坑（第 8・19 図）

P01: 調査区西側中央から検出された。SK02 と P02 を切る形で形成されており、平面形は楕円形、規模は 0.64 m × 0.43 m、深さ 0.24 mを計る。縄文土器、土師器、鉄滓、被熱礫が出土している。

P05： 調査区東端中央部から検出された。遺構の東側は調査区外へ伸びると考えられる。平面形は歪な方形、規模は検出部分で 2.0 m × 0.6 m、深さ 0.43 mを計る。縄文土器、土師器、石器、被熱礫、焼骨が出土している。赤彩高杯が出土していることから、奈良時代のものと考えられる。

溝（第 14 図）

SD01： 調査区北側中央部から検出された。長さ 1.72 m、幅 0.29 m、深さ 0.22 mを計る。縄文土器、土師器が出土している。切り合い関係等から奈良・平安時代のものと考えられる

その他

遺物量が少なく、小片であることから明確な時期の推定を避けたもの、遺物が出土していないものを一括する。

ピット（第 5・8・9・10・11 図）

P04: 調査区中央付近から検出された。平面形は東西方向に長い甕窯形で、規模は 0.72 m × 0.4 m、深さ 0.1 mを測る。縄文土器、被熱礫が出土している。縄文時代以降のものと考えられる。

P08：調査区中央東寄りから検出された。粘土採掘坑群 SX03 の上に形成されており、平面形は円形、規模は直径 0.25 m、深さ 0.2 mを計る。縄文土器、石器が出土しており、縄文時代以降のものと考えられる。

P18：調査区南端中央付近から検出された。平面形は歪な円形、規模は 0.54 m × 0.34 m、深さ 0.2 mを計る。遺物は出土していない。

第Ⅰ表　北代遺跡検出遺構観察表（1）

検出層	遺構種別	遺構名	最大長 (m)	最大幅 (m)	最大深 (m)	出土遺物	時期	備考
中層	粘土採掘坑	SX03	10.45	6	0.8	縄文土器，土師器，石器，剥片，土製品，焼成粘土塊，焼骨，	縄文中期末～晩期後葉	最低62基で構成
中層	粘土採掘坑	SK03	0.7	(1.5)	0.18	縄文土器，焼骨，	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX04	7.8	6.7	(0.6)	縄文土器，須恵器，土師器，石器，土製品，焼成粘土塊，焼骨，炭化物，被熱礫	縄文中期末～晩期後葉	最低35基で構成
下層	粘土採掘坑	SX06	2.55	2.25	0.74	縄文土器，石器，土製品，被熱礫，剥片，炭化物	縄文中期末～晩期後葉	SK08 下最低4基で構成
中層	粘土採掘坑	SX07(SK15)	1.25	2.2	0.1	縄文土器，須恵器，土師器，石器，剥片，土製品，焼土塊，被熱礫	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK25)	1.55	0.75	0.38	縄文土器，焼成粘土塊	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK26)	(1.65)	(0.95)	0.46	縄文土器	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK27)	1.26	1.05	0.28	縄文土器	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK28)	1	1.15	0.23	縄文土器，石器，被熱礫	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK29)	0.63	0.74	0.27	縄文土器，須恵器，土師器，石器，焼成粘土塊，焼骨	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK30)	0.68	0.6	0.44	縄文土器，焼骨	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK31)	0.45	0.65	0.26	縄文土器	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK32)	1.63	1.15	0.44	縄文土器，石器，焼骨，被熱礫	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK33)	0.58	(0.26)	0.31	縄文土器，焼土塊	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK34)	0.72	0.71	0.32	縄文土器	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK35)	1.55	1.15	0.42	縄文土器，近世陶磁器，石器，	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK36)	0.83	0.5	0.33	縄文土器	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SX07(SK37)	0.8	0.7	0.3	無し	縄文中期末～晩期後葉	
中層	粘土採掘坑	SK01	2.08	(1.4)	0.75	縄文土器	縄文	最低4基で構成
中層	粘土採掘坑	SK09	(0.96)	1.4	0.64	縄文土器，近代陶磁器	縄文	最低2基で構成
中層	墓 or 祭祀遺構	SK12	0.75	0.7	0.6	縄文土器，剥片，焼骨，焼土塊	縄文晩期終末	
下層	ピット	P24	0.26	0.25	0.22	縄文土器	縄文	
中層	土坑	P02	0.82	(0.54)	0.2	縄文土器	縄文	
中層	土坑	P13	0.9	0.4	0.28	縄文土器	縄文	
中層	土坑	P14	0.75	0.7	0.08	縄文土器，石器	縄文	
中層	土坑	SK02	0.7	(0.95)	0.3	縄文土器	縄文	
下層	土坑	SK21	(1.1)	0.75	0.28	縄文土器	縄文	S101-3-SK11 下

第２表　北代遺跡検出遺構観察表（2）

検出層	遺構種別	遺構名	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	出土遺物	時期	備考
下層	竪穴建物(1期)	SI01(SK06・07)-1	(8.0)	(3.15)	0.15	縄文土器，須恵器，土師器，石器，鉄滓，焼成粘土塊，紡錘車，焼骨，炭化物	7C後半～8C前半	
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK08	1.8	1.1	0.68	縄文土器，須恵器，土師器，石器，剥片，焼骨，焼成粘土塊，焼土塊，被熱礫	7C後半	鍛冶炉
上層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK10	0.95	0.71	0.28	縄文土器，須恵器，焼成粘土塊，被熱礫，炭化物	7C後半～9C中頃	鍛冶炉
上層	竪穴建物(1期)	SI01-1-P06	0.37	0.3	0.24	縄文土器，土師器，鉄滓	7C後半～9C中頃	SK10関連遺構か
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK19	0.97	1.93	0.24	縄文土器，須恵器，土師器，鉄製品，鉄滓，焼成粘土塊，炭化物	7C後半～8C前半	鍛冶炉，鉄滓392g出土
中層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK13	(0.45)	0.54	0.2	縄文土器，須恵器，土師器，炭化物	7C後半～8C前半	
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK23	(0.58)	0.5	0.7	縄文土器，須恵器，土師器，鉄滓，炭化物	7C後半～8C前半	鍛冶関連祭祀遺構，鉄滓6406g出土
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-P34	0.5	0.65	0.2	土師器	7C代	SI01-1-SK13と遺物接合
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK18	(1.2)	1.45	0.25	縄文土器，石器，石核，鉄滓	7C後半～8C前半	鉄滓122ｇ出土
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-SK20	(0.2)	2.05	0.25	縄文土器，土師器	7C後半～8C前半	
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-P22	(0.13)	0.37	0.44	縄文土器，須恵器，土師器	7C後半～8C前半	
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-P30	(0.1)	0.25	0.24	無し	7C後半～8C前半	
下層	竪穴建物(1期)	SI01-1-P32	0.42	0.4	0.33	土師器	7C後半～8C前半	
中層	竪穴建物(2期)	SI01(SK06・07)-2	7.4	(3.15)	0.15	縄文土器，須恵器，土師器，石器，鉄滓，焼成粘土塊，紡錘車，焼骨，炭化物	8C前半～中頃	
上層	竪穴建物(2期)	SI01-2-SK10	0.95	0.71	0.28	縄文土器，須恵器，焼成粘土塊，被熱礫，炭化物	7C後半～9C中頃	鍛冶炉
上層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P06	0.37	0.3	0.24	縄文土器，土師器，鉄滓	7C後半～9C中頃	SK10関連遺構か
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-SK17	0.94	1.15	0.1	縄文土器，須恵器，土師器，焼土塊，被熱礫，炭化物	8C前半～中頃	炉址
下層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P23	(0.15)	0.45	0.18	焼土塊	8C前半～中頃？	炉址
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P12	0.33	0.48	0.14	縄文土器，土師器	8C前半～中頃	
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P20	0.4	0.37	0.22	縄文土器，須恵器	8C中頃	
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P21	0.3	0.28	0.1	無し	8C前半～中頃	
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P26	0.74	0.55	0.13	縄文土器，土師器	8C前半～中頃	
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P28	(0.15)	0.2	0.1	無し	8C前半～中頃	
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P29	0.36	0.34	0.36	縄文土器，鉄滓	8C前半～中頃	鉄滓337g出土
中層	竪穴建物(2期)	SI01-2-P31	0.19	0.18	0.13	焼土塊，鉄滓	8C前半～中頃	
上層	竪穴建物(3期)	SI01(SK06・07)-3	7	(3.15)	0.1	縄文土器，須恵器，土師器，石器，鉄滓，焼成粘土塊，紡錘車，焼骨，炭化物	8C中頃～9C中頃	鉄滓895g出土
上層	竪穴建物(3期)	SI01-3-SK10	0.95	0.71	0.28	縄文土器，須恵器，焼成粘土塊，被熱礫，炭化物	7C後半～9C中頃	鍛冶炉

第３表　北代遺跡検出遺構観察表（3）

検出層	遺構種別	遺構名	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	出土遺物	時期	備考
上層	竪穴建物(3期)	SI01-3-P06	0.37	0.3	0.24	縄文土器，土師器，鉄滓	7C後半～9C中頃	SK10 関連遺構か，鉄滓112ｇ出土
中層	竪穴建物(3期)	SI01-3-SK11	0.6	0.54	0.1	縄文土器，須恵器，鉄滓，炭化物	8C中頃	鍛冶炉，鉄滓307g出土
中層	竪穴建物(3期)	SI01-3-SK13		0.66	0.22	縄文土器，須恵器，土師器，炭化物	8C中頃～9C中頃	鍛冶炉
上層	掘立柱建物	SB01	2				奈良・平安	P41・42　柱間距離2m,角度：N 12.618° W
上層	掘立柱建物	SB01-P41	0.63	0.67	0.44	縄文土器，土師器，須恵器，石器，被熱礫	奈良・平安	
上層	掘立柱建物	SB01-P42	0.4	0.36	0.4	縄文土器，石器，焼成粘土塊	奈良・平安	
中層	掘立柱建物	SB02	4				奈良・平安	P15・16・17 柱間距離2m　角度：N74.342° E
中層	掘立柱建物	SB02-P15	0.46	0.31	0.2	縄文土器	奈良・平安	
中層	掘立柱建物	SB02-P16	0.4	0.3	0.3	縄文土器，土師器，石器	奈良・平安	
中層	掘立柱建物	SB02-P17	0.33	0.28	0.2	縄文土器，土師器，被熱礫	奈良・平安	
上層	ピット	P07	0.3	0.3	0.13	縄文土器，土師器，石	奈良・平安	
中層	ピット	P09	0.4	0.34	0.365	縄文土器，土師器，鉄滓，被熱礫	奈良・平安	鉄滓17g出土
上層	ピット	P11	0.37	0.36	0.36	縄文土器，土師器，石器，鉄滓，焼土塊	奈良・平安	
中層	ピット	P12-2	0.27	0.28	0.3	縄文土器，土師器	奈良・平安	
上層	ピット	P40	0.42	0.44	0.33	縄文土器，須恵器	奈良・平安	
中層	土坑	P01	0.64	0.43	0.24	縄文土器，土師器，鉄滓，被熱礫	奈良・平安	鉄滓18g出土
中層	土坑	P05	0.8	(0.61)	0.43	縄文土器，土師器，石器，被熱礫，焼骨	奈良	
中層	溝	SD01	1.72	0.29	0.22	縄文土器，土師器	奈良・平安	
上層	ピット	P04	0.72	0.4	0.1	縄文土器，被熱礫	縄文時代以降	
中層	ピット	P08	0.25	0.26	0.2	縄文土器，石器	縄文以降	
中層	ピット	P18	0.54	0.34	0.2	無し	不明	
中層	土坑	P10	0.6	0.35	0.12	縄文土器，土師器，焼骨	縄文時代以降	
下層	土坑	P33	0.59	0.4	0.536	無し	不明	
上層	包含層	SX01	(10.8)	(1.23)	0.26	縄文土器，須恵器，土師器，陶磁器，石器，土製品，鉄滓，焼成粘土塊，被熱礫		鉄滓22ｇ出土
上層	包含層	SX05	(2.64)	(1.12)	(0.20)	縄文土器，須恵器，土師器，土製品，鉄滓，石材，焼成粘土塊，被熱礫		

土坑（第 10・11・14 図）

P10：調査区南側中央部から検出された。粘土採掘坑 SX04 の上に形成されており、平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。規模は 0.6 m × 0.35 m、深さ 0.12 mを計る。縄文土器、土師器、焼骨が出土している。縄文時代以降のものと考えられる。

P33：調査区北端中央部、SI01 の下層西側から検出された。平面形は五角形を呈し、規模は 0.59 m × 0.4 m、深さ 0.54 mを計る。遺物は出土していない。

第4節　遺物

今回調査した地点は、同一地点に縄文時代と古代の遺構が形成されているほか、芋穴等による後世の攪乱が多数見られるため、各遺構とも主要な時期以外の遺物の副次的な混入が多い。また、縄文時代の粘土採掘坑群及び古代の竪穴建物以外の遺構、包含層からの出土遺物は、小片化が多く、図化できるものが少ない。そのため、ここでは縄文時代の粘土採掘坑群と古代の竪穴建物から出土したものを中心に、縄文土器、弥生土器、須恵器・土師器、土製品、石器、骨角器に分けて報告する。

縄文土器（第 20 ～ 22 図、写真図版 7 ～ 8）

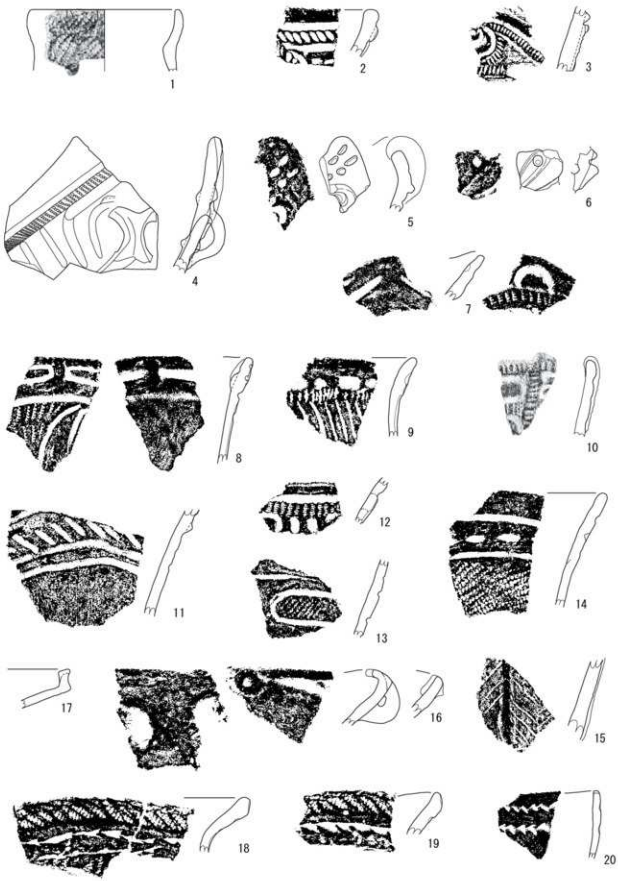
粘土採掘坑群 SX03、04、07 から出土したものを主に報告する。出土遺構について特に記載のないものはこれらの遺構から出土したものである。

1 ～ 17 は中期の土器である。1 は小型の深鉢で、外面に縄文を施し、頸部内面が角張る。新崎式～古府式と考えられる。2、3 は深鉢でキザミのある半隆起線により、円弧状の文様を施す。上山田式と考えられる。4 ～ 15 は串田新式の深鉢である。4 は SX06 から出土したもので、双頭の波状口縁を持つ。5 は双頭波状口縁の波頂部と考えられ、外面刺突文の下に渦巻文を施す。6 は円形の刺突を持つ橋状把手部分と考えられる。15 は外面に葉脈状文を施す。

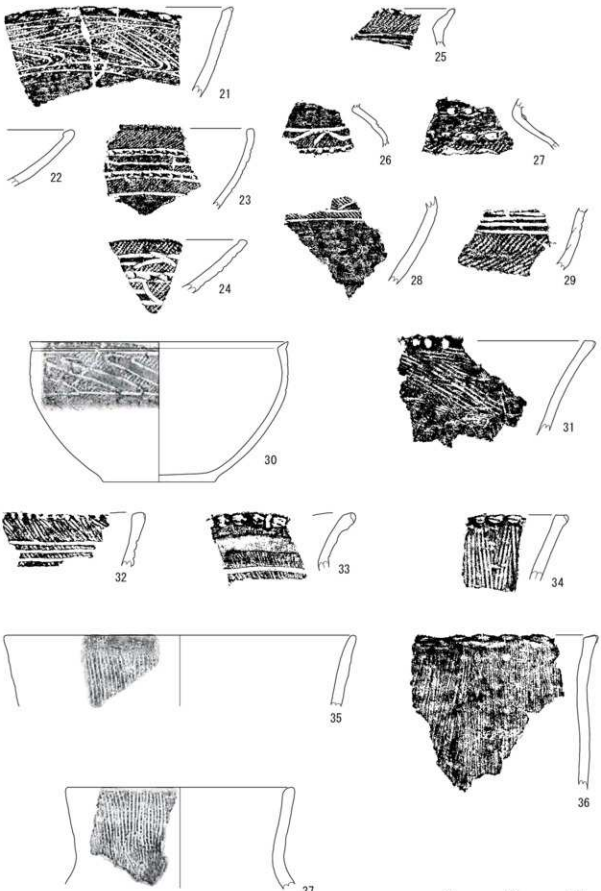
16 ～ 21 は後期の土器である。16、17 は前田～気屋式と見られる浅鉢である。16 は橋状把手を持ち、内面には円文を持つ。口縁部は緩やかな波状口縁を呈し、やや角張った形状になるようである。17 は無文で、口縁部がくの字に屈曲する。18 ～ 20 は気屋式の深鉢である。18、19 は口縁部に縄文を施し、その下に三角形刺突文を持つ。20 は口縁部に 2 条の波状刺突文を持つ。21 は後期後葉～末葉か。口縁部下に斜め方向の沈線を基調とした文様帯を持ち、斜め沈線の間に刺突を施す。滑川市本江遺跡等で出土している稲妻状の沈線文を持つ土器や関東の高井東式との関連が考えられる。

22 ～ 44 は晩期の土器である。22 は無文の精製浅鉢である。外面は丁寧に磨かれている。御経塚式以降のものと考えられる。23 ～ 32 は中屋式である。23、24 は浅鉢である。23 は縄文地に入組文と列点文が施される。24 は赤彩の痕跡が見られる。25 ～ 29 はくの字状口縁を持つ深鉢である。25 ～ 28 は、胴中央が張り出すと見られることから中屋式でも新しい段階のものと考えられる。30 ～ 37 は下野式である。30 は「S」字状帯縄文を交互に磨り消した浅鉢である。31 ～ 37 は地文に条痕を施したもので、33、34 には口縁部に貝殻腹縁を用いた押引文が施される。37 は壺と考えられる。38 は富山市吉岡遺跡の縄文土器分類Ⅷ群 a 類と関連するか。39 ～ 41 は晩期末の土器である。39、40 は吉岡遺跡に類例があり、39 はⅧ群 b 類、40 はⅤ群に当たると考えられる。41 は SK12 から出土した壺で、晩期末長竹式併行、高岡市下老子笹川遺跡Ⅳ期段階に当たると考えられる。

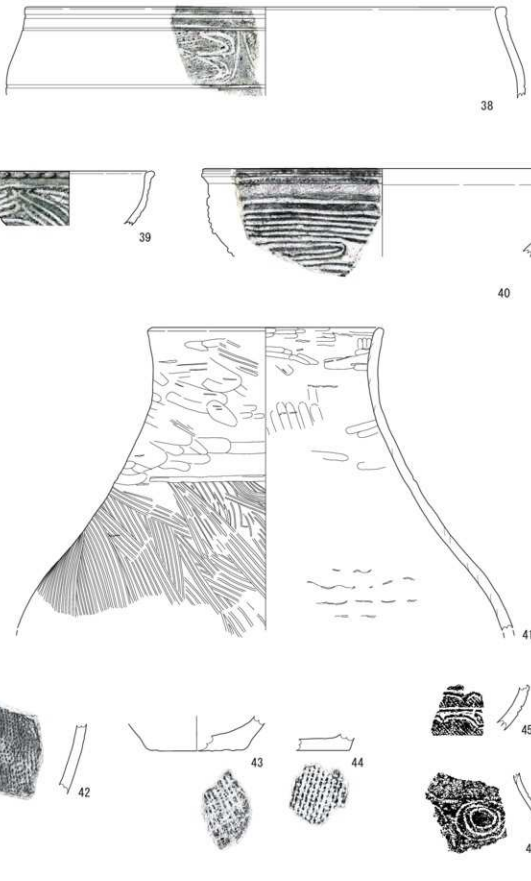
42 は外面に撚糸文を施す深鉢である。共伴資料から中期以降の可能性が高いが、前期以前に遡る可能性もある。43、44 は縄文土器の底部である。底面に 43 はスダレ状圧痕、44 は網代状圧痕を持つ。



第 20 図　北代遺跡出土遺物実測図 (1)



第 21 図　北代遺跡出土遺物実測図 (2)



第 22 図　北代遺跡出土遺物実測図 (3)

弥生土器（第 22 図、写真図版 8）

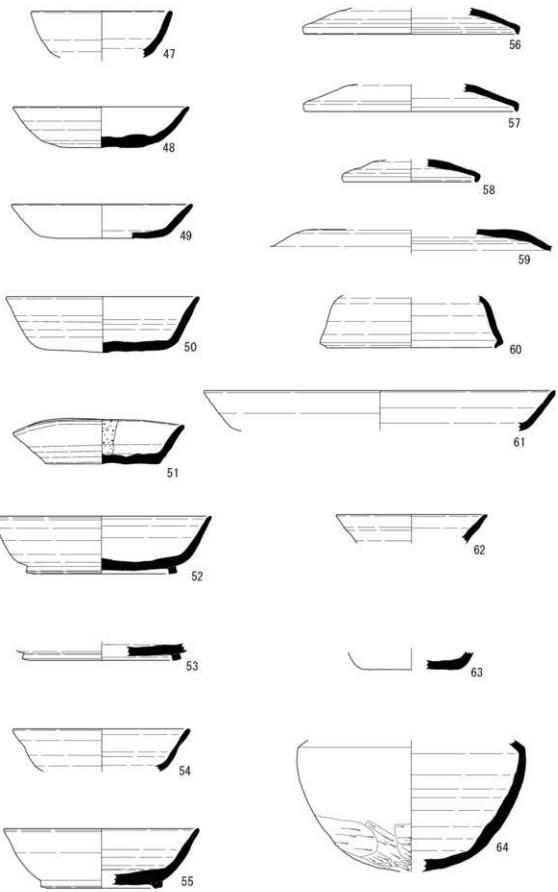
後期の天王山系土器が出土している。45 は頸部が強く屈曲する甕の口縁部と考えられる。細かい縄文を施文した後、ヘラ状工具による 2 条 1 単位の沈線による横線文、下開き弧線文を施す。46 は一般的な天王山系土器と比較し、胎土が荒いものの、文様が類似するため天王山系土器の可能性が有るものとして提示する。甕または壺の頸部と思われ、ヘラ状工具による沈線で円形の文様を描く。富山市富崎千里古墳群から類似する文様のものが出土している。

須恵器・土師器（第 23・24 図、写真図版 8 ～ 9）

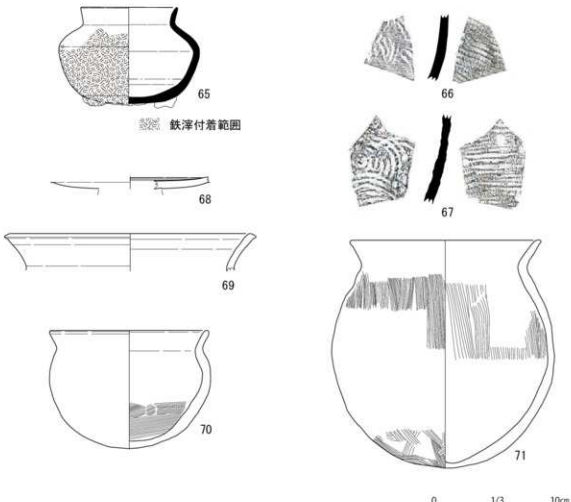
竪穴建物 SI01 から出土したものを主に報告する。

47 ～ 67 は須恵器である。47 は SI01 から出土した杯 G で、片山（2015）の編年（以下片山編年）でⅢ -4 期、7 世紀後半のものと考えられる。出土レベルから 1 期建物に伴うと見られる。48 ～ 51 は杯 A である。48 は SI01-1-SK08 から出土したもので、片山編年Ⅲ -4 期、7 世紀後半のものと考えられる。49 は SI01 から出土したもので、片山編年Ⅲ -5 期、8 世紀前半のものと考えられる。出土レベルから 1 期または 2 期建物に伴うと見られる。50 は SI01-3-SK11 から出土したもので、片山編年Ⅳ -1 期、8 世紀中頃のものと考えられる。51 は SI01-3-SK13 から出土したもので、片山編年Ⅳ -1 期、8 世紀中頃のものと考えられる。52 ～ 55 は杯 B である。52 は表採で片山編年Ⅲ -6 期、8 世紀前半のものと考えられる。53 は SI01 から出土したもので、Ⅲ -6 ～Ⅳ -2 期、8 世紀前半～後半のものと考えられる。出土レベルから 2 期または 3 期建物に伴うと見られる。54、55 は SI01-3-SK13 から出土したもので、片山編年Ⅴ -2 期、9 世紀中頃のものと考えられる。56 ～ 59 は杯 B 蓋である。56 は SI01-1-SK13 から出土したもので、片山編年Ⅲ -4 期、7 世紀後半のものと考えられる。57 は SI01-1-SK13 から出土したもので、片山編年Ⅲ -5 期、8 世紀前半のものと考えられる。58 は SI01 から出土したもので、片山編年Ⅲ -5 期、8 世紀前半のものと考えられる。出土レベルから 2 期建物に伴うと見られる。59 は包含層の一部と考えられる SX01 から出土したもので、片山編年Ⅲ -4 期以降、7 世紀後半以降のものと考えられる。60 は短頸壺の蓋である。SI01 から出土したもので、出土レベルから 3 期建物に伴うと見られる。田嶋・池野（1988）の編年（以下田島・池野編年）でⅢ期、8 世紀中頃のものと考えられる。61 は盤または高杯と考えられる。SI01-1-SK19 から出土したもので、田嶋・池野編年Ⅱ -2 ～Ⅲ期、8 世紀前半～中頃のものと考えられる。62 は長頸瓶と考えられる。SI01 から出土したもので、出土レベルから 1 期または 2 期建物に伴うと見られる。田嶋編年・池野編年Ⅲ期以前、8 世紀中頃以前のものと考えられる。63・64 は瓶類である。63 は SI01 から出土したもので、出土レベルから 3 期建物に伴うとみられる。奈良・平安時代のものと考えられる。64 は SI01-1・2・3-SK10 から出土したものである。底部に入念なケズリを施し、丸底に仕上げる。田嶋編年Ⅲ期以前、8 世紀中頃以前のものと考えられる。65 は小型広口壺で、SI01-1-SK23 から出土したものである。土坑中央に伏せた状態で埋置し、上から鉄滓を投入されていた為、外面は底部を中心に鉄滓の付着が著しい。池野編年Ⅱ -2 期、7 世紀後半のものと考えられる。66、67 は甕の胴部で、66 は SB01-P41 から、67 は P40 から出土したものである。2 点ともタタキによる調整が行われており、66 はタタキによる調整を行った後、内部にカキメによる調整を加えている。

68 ～ 71 は土師器である。68 は高杯である。P05 から出土したもので、内面に赤彩が施されており、奈良時代のものと考えられる。69 は甕である。SI01-1-SK19 から出土したもので、池野（2010）の口縁部形態分類で A2 類に当たる。石名田木舟遺跡出土例等との比較から 7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。70、71 は甕である。70 は SI01-1-SK13 と SI01-1-P34 から出土したもので、両遺構から出土したものが接合した。池野（2010）の口縁部形態分類で A2 類に当たる。田嶋編年Ⅱ -2 ～ 3 期、7 世紀代のものと考えられる。71 は SI01 から出土したもので、出土レベルから 2 期建物に伴うと見られる。池野の口縁部形態分類で A2 類に当たる。田嶋編年Ⅱ -3 ～Ⅲ期、



第 23 図　北代遺跡出土遺物実測図 (4)



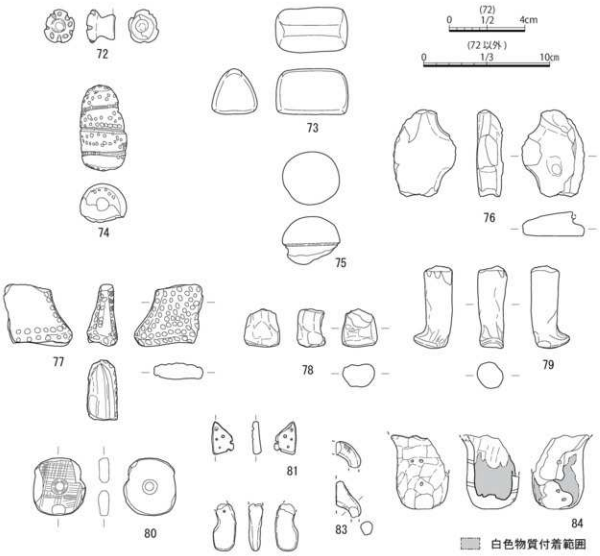
第 24 図　北代遺跡出土遺物実測図 (5)

7 世紀後半～ 8 世紀前半のものと考えられる。

土製品（第 25 図、写真図版 10）

72 は耳飾である。包含層の一部と考えられる SX05 から出土したもので、鼓状で一端は花弁状を呈し、赤彩が施される。県内の耳飾の様相との比較から、縄文時代後・晩期のものと考えられる。73 は三角壇形土製品である。SX03 から出土している。74 は有孔球状土製品である。SX04 から出土している。俵形を呈し、胴部に多数の刺突と 3 本の沈線が施される。類似する形態のものは近隣では石川県米泉遺跡の縄文時代後期の住居址等からまとまった量の出土が報告されているほか、長野県曽利遺跡からも後期の出土例があるようで、縄文時代後期のものと考えられる。75 は土冠の頭部と考えられる。SX03 から出土している。縄文時代晩期の所産の可能性がある。76 ～ 79 は土偶である。76 は胴部で中心部に正中孔が形成されている。SX07-SK15 から出土した。77 ～ 79 は脚部で、77 は外表面に多数の刺突を穿つ。77 は SX04 から、78、79 は SX03 から出土した。いずれも縄文時代のものと考えられる。80 は紡錘車である。SI01 から出土したもので、土師器甕破片を転用したものである。奈良・平安時代のものと考えられる。

81 ～ 84 は不明土製品である。全て SX03 から出土したものである。81 は緻密な胎土で、多数の貫通孔が穿たれる。83 は何らかの土器または土製品の把手か装飾と考えられる。82 は耳朶状を呈し、一端に貫通しない穴が穿たれる。84 は中空の把手状を呈し、外面に 3 カ所の貫通孔が穿たれる。内面に白色物質が付着する。これらの内、82、84 は胎土や焼成状態から古代以降のものと考えられる。

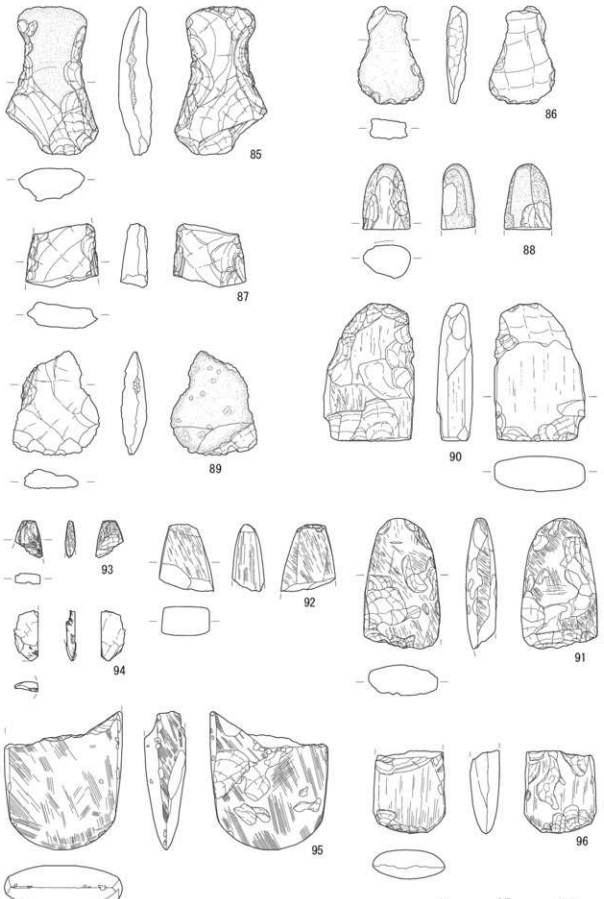


第 25 図　北代遺跡出土遺物実測図 (6)

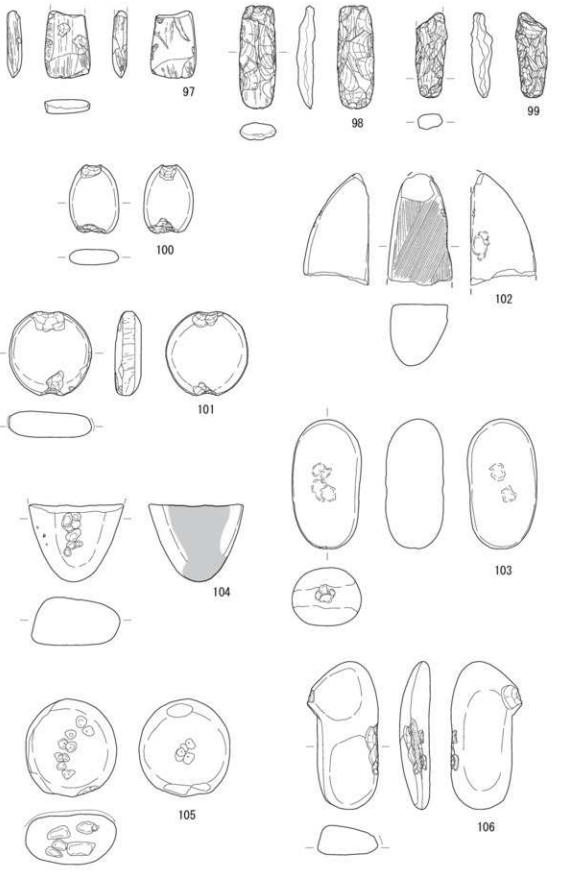
石器（第 26 ～ 28 図、写真図版 11）

粘土採掘坑群 SX03、04、07 から出土したものを主に報告する。出土遺構について特に記載のないものはこれらの遺構から出土したものである。

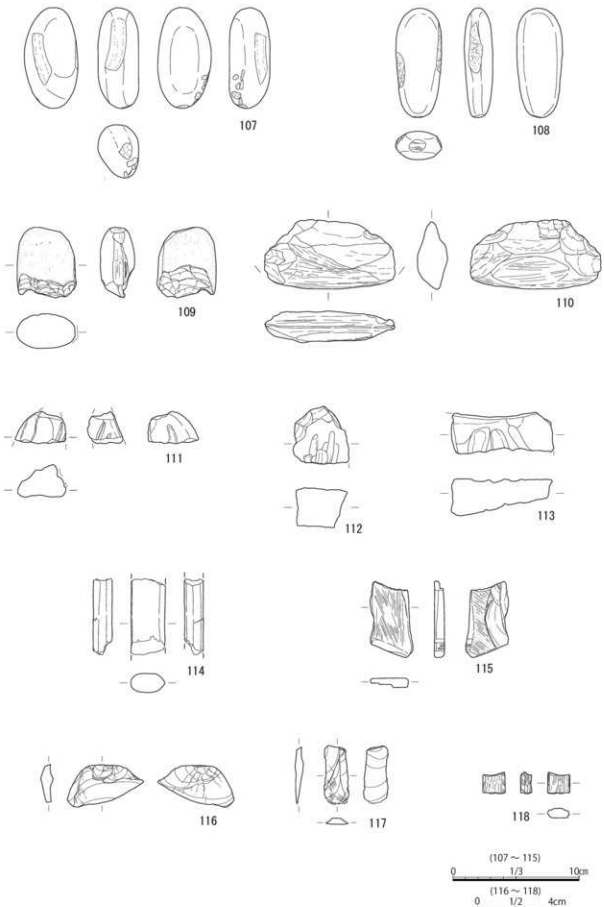
85 ～ 90 は打製石斧である。このうち 88、89 は SI01、90 は SI01-1-SK08 から出土したものであり、付近の縄文時代の遺構や包含層からの混入と考えられる。85、86、89 は撥形で、花崗岩や安山岩、石英斑岩の円礫から剥離した大型剥片を成形して製作しており、一面に原礫面を残す。88 は砂岩製で砥石を転用したものと考えられる。90 は凝灰岩製の磨製石斧の破損品を転用したものと考えられる。91 ～ 99 は磨製石斧である。このうち 98 は SI01-1-SK08 から出土、91 と 97 は出土地不明のもので、98 は下部の縄文時代の粘土採掘坑 SX06 に由来する可能性がある。91 ～ 97 は定角式磨製石斧で、95 と 97 は流紋岩、96 は砂岩製で、それ以外は蛇紋岩類を用いている。98、99 は小型の磨製石斧の未製品と考えられる。100、101 は打欠石錘である。100 は SI01 からの出土で、付近の縄文時代の遺構や包含層からの混入と考えられる。101 は側縁部が研磨により整形されており、砥石などを転用したものと考えられる。102 ～ 105 は凹石である。このうち 105 は SB01-P16 から浮いた状態で出土しており、付近の縄文時代の遺構や包含層からの混入と考えられる。102 は砥石として、103 は叩石としても用いられている。106 ～ 109 は叩石である。



第 26 図　北代遺跡出土遺物実測図 (7)



第 27 図　北代遺跡出土遺物実測図 (8)



第 28 図　北代遺跡出土遺物実測図 (9)

107、109は磨石または砥石としても用いられている。110は擦切石器である。SI01-1-SK08から出土したものであり、下部の縄文時代の粘土採掘坑SX06に由来する可能性がある。砂岩製で内磨砥石としても用いられた可能性がある。111～113は筋砥石である。113はSI01-1-SK18から出土したもので、付近の縄文時代の遺構や包含層からの混入と考えられる。115は砥石で、石材は砂岩である。114は石刀で、石材はホルンフェルスである。116は頁岩のUFである。縁辺部に使用痕とみられる擦痕、摩耗痕が見られる。117は玉髄の剥片である。

骨角器（第28図、写真図版10）

118は棒状骨角器である。SK12の焼土層上から出土したもので、焼けて白色化している。鹿角片を研磨し、扁平な棒状に仕上げる。両端部が欠損しているが、恐らく篦状のものであったと考えられる。

第4表　北代遺跡出土遺物観察表（1）

図版No.	種別器種	遺構	法量(cm)（ ）内：復元、〈〉内：残存 口径(最大幅)	器高(最大長)	底径(最大厚)	重量(g)	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	SK25		〈4.9〉	(11.6)		内：7.5YR5/4 褐 外：7.5YR7/6 橙	新崎～古府式？
2	縄文土器 浅鉢	SX03 中層		〈3.7〉			内：5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	上山田式，基隆帯上にキザミ
3	縄文土器 深鉢	SK35		〈5.1〉			内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR6/4 にぶい橙	上山田式，キザミのある基隆帯と半隆起線による渦巻き文
4	縄文土器 深鉢	SX06		〈10.8〉			内：10YR7/6 明黄褐 外：10YR6/4 にぶい黄橙	串田新式，双頭波状口縁
5	縄文土器 深鉢	SX03 上層		〈6.0〉			内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	串田新式，双頭波状口縁，刺突文の下に渦巻文
6	縄文土器 深鉢	SK32		〈3.3〉			内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	串田新式，円形の刺突がある橋状把手部分
7	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈3.5〉			内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	串田新式，山形波頂の口縁部。半円状の沈線文下に貝殻腹縁刺突文，内面に凹線
8	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈8.5〉			内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	串田新式，口縁部に沈線による工字状文、胴部貝殻腹縁文に結節形区画文，口縁部内面に凹線
9	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈6.6〉			内：7.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR6/4 にぶい橙	串田新式，口縁部に円文を入れ、その下に貝殻腹縁文と斜行沈線
10	縄文土器	SK32		〈6.3〉			内：5YR6/8 橙 外：10YR8/3 浅黄橙	串田新式，貝殻刺突を持つ半隆起線による工字状文を施すか
11	縄文土器 深鉢	SX03 下層		〈8.4〉			内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	串田新式，胴部，剥落した隆線の下に斜行する短沈線と平行する2条の沈線，下位は条痕
12	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈3.6〉			内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	串田新式，胴部は沈線下に櫛状具による刺突と沈線による工字状文
13	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈6.2〉			内：5YR7/6 橙 外：7.5YR6/4 にぶい橙	串田新式，胴部は縄文地に沈線による工字状文
14	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈9.0〉			内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	串田新式，口縁部は2条の沈線間に連続する短沈線。胴部は縄文
15	縄文土器 深鉢	SX03 中層		〈6.6〉			内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：5YR7/6 橙	串田新式，胴部に幅の隆線と業脈状文
16	縄文土器 浅鉢	SX03 上層		〈4.0〉			内：7.5YR4/4 褐 外：5YR5/6 明赤褐	前田～気屋式，橋状把手部分，内面には円文，口縁部は緩やかな波状口縁、やや角張るか
17	縄文土器 浅鉢	SX03 下層		〈3.0〉			内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	前田～気屋式，くの字に屈曲する口縁部，無文
18	縄文土器 深鉢	SK27		〈4.3〉			内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：10YR7/2 にぶい黄橙	気屋式，口縁部は斜縄文の下に2段の連続する三角刺突文，胴部は縦縄文

第５表　北代遺跡出土遺物観察表（2）

図版No.	種別器種	遺構	法量(cm)（ ）内：復元、〈〉内：残存 口径（最大幅）	器高（最大長）	底径（最大厚）	重量(g)	色調	備考
19	縄文土器 深鉢	SK27		(3.3)			内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：10YR5/2 灰黄褐	気屋式，口縁部は斜縄文と連続三角刺突文
20	縄文土器 深鉢	SK35		(5.2)			内：10YR8/4 浅黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	気屋式，口縁部に2条の波状刺突文
21	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(7.2)			内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：7.5YR5/4 にぶい褐	後期後葉か，口縁部は縄文地に沈線文、口唇部刻み
22	縄文土器 浅鉢	SX03 中層		(4.5)			内：2.5Y3/1 黒褐 外：2.5Y3/1 黒褐	御経塚式以降，無文の浅鉢
23	縄文土器 浅鉢	SX03 上層		(6.2)			内：2.5Y6/1 黄灰 外：10YR7/2 にぶい黄橙	中屋式，口縁部は縄文地に列点文と鍵手状文，文様帯に赤彩
24	縄文土器 浅鉢	SX03 中層		(4.3)			内：7.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR4/2	中屋式，浅鉢の口縁部。縄文地に入り組文と列点文
25	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(3.0)			内：10YR4/1 褐灰 外：10YR5/2 灰黄褐	中屋式，口縁部は縄文地に赤彩，口唇部に刻み
26	縄文土器 深鉢	SX03 中層		(3.4)			内：2.5Y4/1 黄灰 外：2.5Y8/2 灰白	中屋式，胴部，縄文地に入り組み文と列点文
27	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(4.0)			内：10YR5/4 にぶい黄褐 外：5YR5/4 にぶい赤褐	中屋式，胴部、列点文の下位は縄文地に連続波状沈線文
28	縄文土器 深鉢	SX03		(7.0)			内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR6/2 灰黄褐	中屋式，胴部は縄文地に沈線文、下位は無文
29	縄文土器 深鉢	カクラン I 上層		(4.9)			内：7.5YR4/2 灰褐 外：2.5Y4/1 黄灰	中屋式，胴部，平行する沈線、下位は縄文
30	縄文土器 浅鉢	SX04	(20.8)	21.0	9.1		外：10YR5/3 にぶい黄橙～ 10YR8/4 浅黄橙 内：10YR8/3 浅黄橙～ 10YR6/4 にぶい黄橙	下野式，口縁部下に「S」字状帯縄文を交互に磨り消し
31	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(7.3)			内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：10YR4/2 灰黄褐	中屋式，条痕の粗製深鉢，口唇部に刻み
32	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(4.3)			内：7.5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	下野式，口縁部は斜めの条痕と４条の沈線、口唇部刻み
33	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(4.6)			内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR6/6 橙	下野式，口縁部は縦条痕と幅広の凹線と沈線、口唇部貝殻腹縁による押し引き
34	縄文土器 深鉢	SK29 上層		(5.2)			内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：5YR4/4 にぶい赤褐	下野式，口縁部～胴部は縦条痕、口唇部貝殻腹縁による押し引き
35	縄文土器 深鉢	SX03	(28.0)	(5.7)			内：7.5YR7/6 橙 外：5YR4/6 赤褐	下野式，櫛状工具による縦方向の条線
36	縄文土器 深鉢	SX03 上層		(12.2)			内：5YR6/6 橙 外：5YR5/6 明赤褐	下野式，口縁部～胴部は縦条痕、口唇部刻み
37	縄文土器	SK32		(8.1)	(17.8)		内：7.5YR3/4 暗褐 外：5YR6/6 橙	下野式，外面に縦条痕
38	縄文土器 深鉢	SX03	(37.8)	(7.2)			外：10YR8/1 灰白 内：2.5Y6/2 灰黄～ 2.5Y6/1 黄灰	晩期後葉か，吉岡Ⅲ群ａ類と関連か　外面赤彩
39	縄文土器 浅鉢	SX04	(13.0)	(4.3)			外：10YR5/1 褐灰～ 10YR8/2 灰白 内：10YR4/1 褐灰	長竹式併行，吉岡Ⅳ群ｂ類　外面赤彩
40	縄文土器 浅鉢	SX04	(28.0)	(7.0)			外：7.5YR6/6 橙 内：10YR8/3 浅黄橙	長竹式併行，吉岡Ⅴ群　外面に流水形の工字文
41	縄文土器 壺	SK12	18.0	—	(24.1)		内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR7/6 橙	晩期、笹川Ⅳ期（長竹式・大洞Ａ式に平行）、調整　内：ミガキ・ヘラナデ・輪積痕　外：条痕・ミガキ・ヘラナデ・輪積痕
42	縄文土器 深鉢	SX03		(5.5)			内：2.5Y8/3 淡黄 外：2.5Y8/3 淡黄	中期以前か，外面に撚糸文
43	縄文土器 底部	SX03		(2.8)	(7.3)		内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：10YR5/4 にぶい黄橙	スダレ状圧痕あり
44	縄文土器 底部	SX03		(1.3)			内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	網代状圧痕あり

第６表　北代遺跡出土遺物観察表（3）

図版No.	種別器種	遺構	法量(cm)（ ）内：復元、〈〉内：残存 口径(最大幅)	器高(最大長)	底径(最大厚)	重量(g)	色調	備考
45	弥生土器 壺	SX03 上層		(3.4)			内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：7.5YR6/4 にぶい橙	天王山系，単節 RL 縄文後に、半截竹管による横方向の半隆起線文
46	弥生土器 壺?	SK28 下層		(5.4)			内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	天王山系?，胴部に三重の同心円文
47	須恵器 坏G	SI01-1	(5.5)	(3.7)			内：2.5Y8/2 灰白 外：2.5Y8/2 灰白	片山編年Ⅲ-4 期，7 世紀後半
48	須恵器 杯A	SI01-1-SK08	(14.0)	3.2	5.4		外：5Y7/2 灰白 内：2.5Y8/1 灰白	片山編年Ⅲ-4期，7世紀後半，底面回転ヘラ切り＋カキメ
49	須恵器 杯A	SI01-1or2	(14.4)	2.7	(9.8)		内：2.5Y7/2 灰黄 外：2.5Y7/2 灰黄	片山編年Ⅲ-5 期，8 世紀前半，SI01 下層
50	須恵器 坏A	SI01-1-SK11	15.2	4.4	9.9		内：2.5Y6/1 黄灰 外：2.5Y6/1 黄灰	片山編年Ⅳ-1 期，8 世紀中頃
51	須恵器 杯A	SI01-1-SK13	13.6	3.7	9.0		表：2.5Y6/1 黄灰 内：2.5Y7/1 灰黄	片山編年Ⅳ-1 期、8 世紀中葉
52	須恵器 坏B	表採	(17.4)	4.6	10.8		内：5Y6/1 灰 外：5Y6/1 灰	片山編年Ⅲ-6 期，8 世紀前半
53	須恵器 坏B	SI01	(11.4)	(1.3)			内：10YR6/2 灰黄褐 外：10YR6/2 灰黄褐	片山編年Ⅲ-6 ～Ⅳ-2 期，8 世紀前半～後半
54	須恵器 杯B	SI01-3-SK13	(13.8)	(3.4)			内：2.5Y5/1 黄灰 外：2.5Y4/1 黄灰	片山編年Ⅴ-2 期，9 世紀中頃
55	須恵器 杯B	SI01-3-SK13	(15.4)	4.8	(8.5)		内：5Y6/2 灰オリーブ 外：5Y6/2 灰オリーブ	片山編年Ⅴ-2 期，9 世紀中頃
56	須恵器 坏B蓋	SI01-1-SK13	(17.0)	(2.1)			内：2.5Y5/3 黄褐 外：2.5Y7/1 灰白	片山編年Ⅲ-4 期，7 世紀後半
57	須恵器 杯B蓋	SI01-1-SK13	(16.8)	(2.2)			内：2.5Y5/2 暗灰黄 外：N6/0 灰	片山編年Ⅲ-5 期，8 世紀前半
58	須恵器 坏B蓋	SI01	(10.4)	(1.8)			内：5Y6/2 灰オリーブ 外：7.5Y5/1 緑灰	片山編年Ⅲ-5 期，8 世紀前半
59	須恵器 坏B蓋	SX01		(1.8)			内：2.5Y6/2 灰黄 外：5Y6/1 灰	片山編年Ⅲ-4 期以降，7 世紀後半以降
60	須恵器 短頸壺蓋	SI01-3	(13.3)	(4.1)			内：5Y6/1 灰 外：5Y4/1 灰	田嶋編年・池野編年Ⅲ期，8 世紀中頃
61	須恵器 盤or高坏	SI01-1-SK19	(25.6)	(3.2)			内：5Y6/1 灰 外：7.5Y6/1 灰	田嶋編年・池野編年Ⅱ-2 ～Ⅲ期，8 世紀前半～中頃
62	須恵器 長頸瓶	SI01-1or2		(2.3)	(11.8)		内：10YR6/2 灰黄褐 外：10YR6/2 灰黄褐	田嶋編年・池野編年Ⅲ期以前，8 世紀中頃以前
63	須恵器 瓶類	SI01-3		(1.4)	(7.2)		内：5Y6/1 灰 外：5Y6/1 灰	奈良・平安時代
64	須恵器 瓶類	SI01-1・2・3-SK10		(10.4)			内：10Y5/1 灰 外：10BG5/1 青灰	田嶋編年Ⅲ期以前，8 世紀中頃以前
65	須恵器 広口壺	SI01-1-SK23	7.6	7.7	7.0		表：2.5Y8/2 灰白 内：2.5Y6/2 灰黄	池野編年Ⅱ-2 期、7 世紀後半
66	須恵器 甕　胴部	SB01-P41		(5.3)			外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄	内外面にタタキの後、内面にカキメ
67	須恵器 甕　胴部	P40		(7.0)			外：N7/0 灰白 内：5Y5/1 灰	内外面にタタキ
68	土師器 高杯	P05		(0.9)			外：10YR8/2 灰白 内：10R5/8 赤	奈良時代，内面赤彩
69	土師器 甕	SI01-1-SK19	(19.0)				表：2.5YR3 淡黄 内：10YR8/2 灰白	7 世紀後半～8 世紀第 2 四半期，口縁部形態 A2 類
70	土師器 甕	SI01-1-SK13 下層 +P34	12.5	9.4			内：5YR5/8 明赤褐 外：2.5YR6/6 橙	田嶋編年Ⅱ-2 ～3 期，7 世紀代，口縁部形態 A2 類
71	土師器 甕	SI01	14.8	18.1			内：5YR7/8 橙 外：5YR7/8 橙	田嶋編年Ⅱ-3 ～Ⅲ期，7 世紀後半～8 世紀前半

第７表　北代遺跡出土遺物観察表（4）

図版No.	種別器種	遺構	法量(cm)（ ）内：復元、〈〉内：残存				色調	備考
			口径（最大幅）	器高（最大長）	底径（最大厚）	重量(g)		
72	土製耳飾	SX05	〈1.6〉	1.8	1.5		10YR4/1 褐灰～10YR8/1 灰白	後晩期か，上面花弁状，赤彩あり
73	三角壇形土製品	SX03	3.6	3.7	5.7		7.5YR6/6 橙～10YR6/2 灰黄褐	文様無し
74	有孔球状土製品	SX04	3.7	〈3.1〉	6.8		10YR8/4 浅黄橙	後期，後期か
75	土冠頭部	SX03	4.2	4.5			10YR8/3 浅黄橙～7.5YR7/6 橙	
76	土偶胴	SK15	〈6.9〉	〈5.0〉	1.9		7.5YR4/2 灰褐～7.5YR5/4 にぶい褐	
77	土偶足	SX04	〈5.7〉	〈4.9〉	2.2		7.5YR7/6 橙～10YR8/2 灰白	
78	土偶足	SX03	2.8	〈3.1〉	1.8		7.5YR7/6 橙～7.5YR7/1 明褐灰	
79	土偶足	SX03	2.45	〈6.4〉	2.05		7.5YR8/4 浅黄橙～7.5YR8/1 灰白	
80	紡錘車	SK06	〈4.2〉	4.5	0.8		表：7.5YR7/6 橙～10YR3/1 黒褐 裏：10YR8/3 浅黄橙	土師器甕破片を転用
81	不明土製品	SX03	2.55	3.9	0.9		表：10YR4/1 褐灰 裏：7.5YR8/4 浅黄橙	
82	土製品	SX03 上層	〈1.8〉	〈3.8〉	〈1.1〉		内： 外：7.5YR6/6 橙	平板な作りで，内側縁に狭り，外側縁はやや稜をもつ。新しいか
83	土製品?	SX03 中層	〈1.9〉	〈2.9〉	〈1.0〉		内： 外：7.5YR7/6 橙	把手か
84	土製品	SX03 中層		〈5.9〉	1.4		内：5YR7/6 橙 外：5YR7/6 橙	対面する位置に３ヶ所ずづの小穿孔がある．内外面に白色物質が付着
85	打製石斧	SX03	11.8	2.6	〈6.8〉	234.3		石材：花崗岩、バチ形
86	打製石斧	SX03	〈7.6〉	1.6	5.1	69.3		石材：安山岩、バチ形、縦型剝片か
87	打製石斧	SX03	〈5.0〉	1.9	〈5.8〉	68.9		石材：安山岩、基部のみバチ形か
88	打製石斧	SK06	〈5.2〉	2.7	3.7	80.1		石材：砂岩、礫石を転用
89	打製石斧	SK07	8.2	2.0	〈6.8〉	99.4		石材：石英斑岩、くびれの強いバチ型、横長破片
90	打製石斧	SK08	10.9	2.8	7.1	349.9		石材：凝灰岩、磨製石斧からかなり使い込む，風化が激しい，刀部側面の一方が激しく使用され縦斧として使用
91	磨製石斧		〈10.3〉	2.4	6.0	226.4		石材：蛇紋岩類、粗割痕がある？
92	磨製石斧	SX03	〈5.3〉	〈2.5〉	〈4.2〉	84.6		石材：蛇紋岩類
93	磨製石斧	SX03	〈2.9〉	0.8	〈2.2〉	6.9		石材：蛇紋岩（色が黒緑）類、小型磨斧、基部のみ
94	磨製石斧	SX03	〈4.0〉	0.7	〈1.9〉	6.2		石材：蛇紋岩類、一部の刀部のみ
95	磨製石斧	SX03	11.0	3.3	9.3	388.9		石材：流紋岩類

第８表　北代遺跡出土遺物観察表（5）

図版No.	種別器種	遺構	法量(cm)（ ）内：復元、〈〉内：残存				色調	備考
			口径（最大幅）	器高（最大長）	底径（最大厚）	重量(g)		
96	磨製石斧	SK15-1	〈6.5〉	2.3	〈5.7〉	112.9		石材：砂岩、両凸刃、粗割整形の痕跡あり
97	磨製石斧		〈5.3〉	1.1	3.6	40.7		石材：流紋岩、使用痕あり、両凸刃、使用時の荒削りの痕跡あり
98	磨製石斧未製品	SK08	〈8.2〉	〈1.3〉	2.9	41.9		石材：流紋岩、磨斧の制作途中で使用か
99	磨製石斧未製品	SK15	〈6.7〉	1.6	2.4	31.2		石材：流紋岩
100	石錘	SK07	5.4	1.2	3.9	43.6		石材：砂岩
101	石錘	SX04	6.7	2.1	6.5	143.3		石材：砂岩
102	砥石	SX03下層	〈5.1〉	〈8.9〉	5.2	261.63		石材：砂岩，上・下端部を欠損．磨・凹石の欠損品を素材とし，割面に顕著な摩耗痕．砥面は平滑で光沢を帯びる
103	敲石+凹石	SK32	5.6	10.4	4.6	406.00		石材：砂岩．全体に摩滅．表・裏面中央及び下端に敲打痕
104	凹石	SX03	〈6.1〉	3.8	7.5	223.5		石材：砂岩
105	磨石	P16	7.8	4.0	7.2	335.7		石材：花崗岩、叩石と磨石の両用
106	石錘	SK15	11.8	2.3	5.5	209.3		石材：砂岩、叩石か
107	叩石	SX03	8.0	4.2	3.2	161.5		石材：シルト岩（堆積岩）、端部にたたき4，側面に磨り痕
108	磨石	SX03	8.7	2.3	3.1	108.5		石材：安山岩、磨石・叩石兼用か
109	叩石	SX03	〈5.6〉	2.7	4.7	88.6		石材：安山岩、すり石兼用か
110	擦切石器	SK08	〈5.4〉	2.5	10.3	139.0		石材：砂岩，擦切石器、内磨砥石（玉の抉れを磨く）か
111	筋砥石	SX03	〈2.6〉	2.8	〈4.0〉	24.7		石材：凝灰岩、ほぼ全面使用か
112	砥石	SK15	〈4.6〉	〈3.2〉	〈4.4〉	72.1		石材：凝灰岩、砥面１面
113	筋砥石	SK18-1	8.0	2.9	3.2	75.5		石材：砂岩
114	石刀	SX03上層	2.8	〈6.1〉	1.5	42.65		石材，ホルンフェルス，上・下端を欠損，全体に研磨加工され、断面は楔形を呈する
115	砥石	SK29	3.4	〈6.1〉	0.8			石材：砂岩
116	剥片	SX03中層	4.1	2.3	0.65	4.50		石材：玉髄，小型の横長剥片
117	U.F.	SX03	1.3	3.1	0.45	0.75		石材：頁岩，縁端部を欠損，縁辺部に擦痕と摩耗痕。表面の摩耗範囲は光沢を帯びる
118	骨角器棒状骨角器	SK12	〈10.1〉	12.0	5.5			被熱，白色化　鹿角製　箆か

第５節　自然科学分析

北代遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

富山県富山市に所在する北代遺跡は、富山市街地の西約 3km に連なる呉羽山丘陵の北麓に立地する。測定対象試料は、粘土採掘穴から出土した土器に付着する炭化物３点である（表１）。炭化物は表１に記載した部位から採取した。

2　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ(1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代

に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C年代は、試料1が2470 ± 20yrBP、試料2が4310 ± 30yrBP、試料3が2390 ± 20yrBPである。暦年較正年代（1 σ）は、試料1が750 ～ 518cal BCの間に4つの範囲、試料2が2926 ～ 2891cal BCの範囲、試料3が483 ～ 402cal BCの範囲で示され、試料1が縄文時代晩期後葉頃、試料2が縄文時代中期中葉頃、試料3が縄文時代晩期末葉から弥生時代前期頃に相当する（小林編 2008、小林 2009、小林 2017）。SX03から出土した試料1と試料3は、おおむね近い値を示した。

試料の炭素含有率は47%（試料2）から64%（試料1）のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-192256	試料1	粘土採掘穴 SX03 上層 No.216 深鉢 胴部上位外面	土器片付着炭化物	AaA	−25.72 ± 0.48	2,470 ± 20	73.57 ± 0.22
IAAA-192257	試料2	粘土採掘穴 SX04 No.7 深鉢 口縁部内面	土器片付着炭化物	AaA	−24.30 ± 0.47	4,310 ± 30	58.48 ± 0.21
IAAA-192258	試料3	粘土採掘穴 SX03 中層 深鉢 胴部内面	土器片付着炭化物	AaA	−25.95 ± 0.48	2,390 ± 20	74.30 ± 0.23

[IAA登録番号：#A059]

表2　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値、暦年較正用 ^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C補正あり		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-192256	2,470 ± 20	73.57 ± 0.22	2,465 ± 24	750calBC − 683calBC (29.7%) 668calBC − 638calBC (13.1%) 621calBC − 618calBC (0.9%) 591calBC − 518calBC (24.5%)	764calBC − 477calBC (93.1%) 463calBC − 456calBC (0.7%) 445calBC − 431calBC (1.6%)
IAAA-192257	4,310 ± 30	58.48 ± 0.21	4,309 ± 28	2926calBC − 2891calBC (68.2%)	3011calBC − 2949calBC (18.2%) 2944calBC − 2886calBC (77.2%)
IAAA-192258	2,390 ± 20	74.30 ± 0.23	2,386 ± 24	483calBC − 402calBC (68.2%)	537calBC − 398calBC (95.4%)

［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

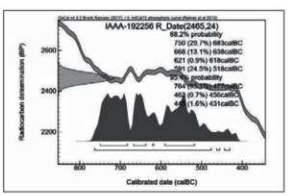
小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

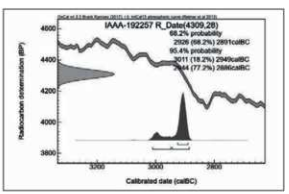
小林謙一 2017 縄文時代の実年代 —土器型式編年と炭素14年代—，同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363





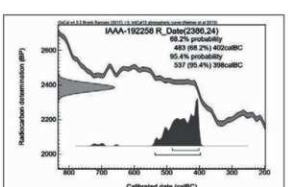


図1 暦年較正年代グラフ（参考）

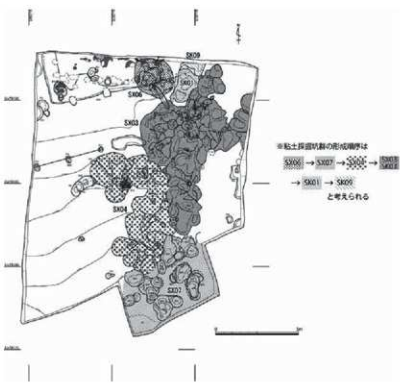
第６節　総括

今回の調査では縄文時代の粘土採掘坑６群20基・墓または祭祀遺構と考えられる土坑１基・土坑５基・ピット１基、古代の竪穴建物１棟・掘立柱建物２棟・土坑２基・ピット５基・溝１条を検出した。これまでの発掘調査成果を含めて、遺跡の時期と性格を検討したい。

１　縄文時代の粘土採掘坑について

今回の調査で確認された縄文時代の粘土採掘坑は調査区中央の斜面部で確認され、複数の土坑が重複したものである。１つ１つの土坑の平面形態は円形・楕円形・隅丸方形・不整形と様々であり、平面規模は径１～２ｍ前後を平均とする。複数回の粘土採掘の結果、このような形状となったと推定できるが、それぞれの採掘の単位を明確に把握することができなかったため、平面的に区分できるまとまりを捉えて20基を６群に分けた。

断面形状は円筒形を基本とするが、下部を更に掘り広げ横へオーバーハングしている部分もある。遺構埋土は黒褐色土～暗褐色土に地山である黄色土をブロック状に含み、底面は粘土層に達している。埋土中の遺物は、縄文土器・石器があり、大半は破片である。粘土を採掘するための掘削具である打製石斧が３点出土している。



第 29 図　北代遺跡の縄文時代の粘土採掘坑

出土した縄文土器は晩期末葉の条痕文土器を主体としているが、中期～晩期までの土器がある程度まとまって出土しており、北代台地平坦部で営まれた集落の存続時期と連動して粘土採掘が行われていたと考えられる。

縄文時代の粘土採掘坑については、これまでの調査事例から、いくつかの共通点が認められる。①立地は斜面地や台地縁辺部に位置し、土坑は粘土層を掘り込む。②単独の例は少なく群を構成することが多い。③１つ１つの粘土採掘坑の規模は大形のものは少なく、大形となるのは複数の粘土採掘坑が重複して掘削された結果である（及川・山本2001）。

一方、相違点としては調査範囲の問題もあるが、規模・継続期間のほか、同時期の集落と隣接する事例としない事例が挙げられる。県内においては、調査地区内に同時期の集落が存在している黒河尺目遺跡と、今回の北代遺跡が前者にあたる。

北代遺跡の所在する北代台地周辺では開析谷が発達しており良質な粘土が堆積していること、斜面であることから当時の地表近くに粘土層が存在し粘土の発見が容易なこと、縄文時代の技術でも採掘が可能なことから、集落の存続時期である縄文時代中期から晩期まで粘土採掘が連綿と継続されてきたのであろう。（近藤）

所在地	遺跡名	立 地	時 代	備 考
富山県	北代遺跡 平成14年度調査区	台地斜面	中～晩期	6群 20 基 集落隣接
富山県	黒河尺目遺跡	丘陵斜面	中～後期	7群 36 基 集落隣接
青森県	三内丸山	台地縁辺	中期	中規模 集落隣接
岩手県	御所野	台地縁辺	中期	中規模 集落隣接
岩手県	塩ヶ森Ⅰ		前～中期	土坑
秋田県	家ノ後	斜面	後～晩期	4基 小規模 集落隣接
福島県	羽白C	段丘面縁辺	晩期	
茨城県	東大橋原	台地	中期	
茨城県	西中根	台地	中～後期	
千葉県	一本松	台地斜面	後期	大規模 隣接集落なし
千葉県	南作	台地斜面	後～晩期	大規模 隣接集落なし
東京都	四葉	台地斜面	前期？	
東京都	下宅部	丘陵縁辺	後期	
東京都	多摩ニュータウンNo.248遺跡	尾根と谷に挟まれた斜面	中～後期	6群 大規模 隣接集落なし
長野県	沢田鍋土遺跡 新幹線地点	丘陵縁辺	後期	3群 中規模
長野県	沢田鍋土遺跡・清水山窯跡	丘陵上	中～後期	2基 小規模
長野県	池田端窯跡	谷に面した斜面	縄文	9基

第9表　県内及び県外の主な縄文時代の粘土採掘坑

（及川良彦・山本孝司 2001、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004などを参照・一部加筆改変）

2　縄文時代晩期の墓または祭祀遺構について

今回報告した地点からは、縄文時代晩期末の墓または祭祀遺構と考えられるSK12が検出された。本遺構は径0.7m前後の土坑内部に壺上半部を埋納したものであり、壺を埋納した後に火を焚き、動物の骨や骨角器を燃やした形跡が認められる。

当該期における日本列島中央部では壺を蔵骨器として土坑に埋納する再葬墓が発達することが指摘されており（設楽 2007）、本遺構も再葬墓またはそれと関連する祭祀跡と考えられる。富山県内における縄文時代晩期の墓の様相を概観すると、土坑墓が主体を成し、埋設土器を伴うものも用いられる土器は深鉢が主体を成す。このことから本遺構は墓であるとするならば、県内でも特異な様相を示すものと言え、その成立には他地域からの影響を考える必要があるだろう。また、富山県内では縄文時代晩期に単独で豊富な副葬品を持つ土坑墓が出現し、階層差の出現が伺われることを指摘されているが（町田 2019）、土器を埋納した後にその上で火を用いた祭祀を行った特殊な形跡を持つ点や本遺構の周辺に墓坑と見なせる様な遺構が見られない点を踏まえれば、集落内での特別な位置付けを持った人の墓や葬送儀礼に関連する可能性も考えられるであろう。これらの点については、今後、周辺地域や弥生時代にまで視野を広げた更なる検討が必要である。（納屋内）

3　北代遺跡の古代の遺構と周辺の集落

今回の調査で確認された古代の遺構には竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピットがある。7世紀後半～9世紀中頃までの3期にわたって営まれたSI01は鍛冶工房と考えられ、鉄滓8,622gと焼成粘土塊、被熱によって割れた石が多く出土した。特に建物内の土坑SK10は鍛冶に関連する炉跡とみられ、焼土や焼土塊、炭化物が出土し、1期建物のSK23からは6,406gと大量の鉄滓が出土している。

これまでの調査で、北代遺跡の古代の遺構としては鍛冶工房1棟、竪穴建物8棟、掘立柱建物1棟が検出されている。縄文時代の集落の更に外側の遺跡の西と南側に分布する。

昭和53年度に24,000㎡を対象に実施した試掘調査では、奈良～平安時代の竪穴建物を5棟検出し、出土遺物から8世紀末～9世紀中頃に位置付けられる。

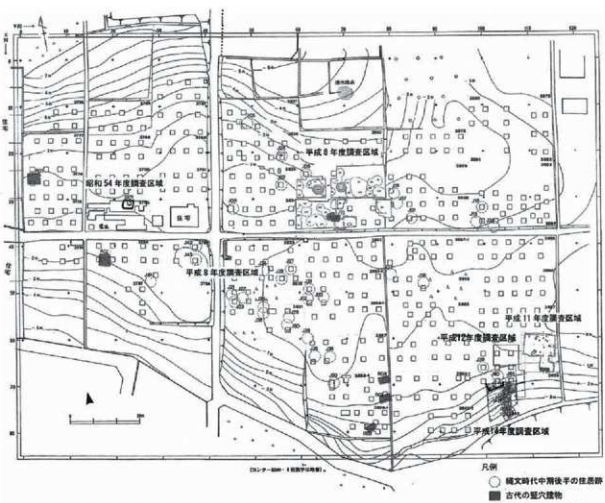
昭和54年度の調査では、遺跡西側で内部に炉跡がある竪穴建物を1棟検出し、鉄滓や鉄製品、

羽口が出土したことから奈良時代の鍛冶工房跡と推定した。

平成８年度、史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業に伴い、縄文時代建物復元予定地である集落中央部で実施した確認調査では、奈良時代の竪穴建物２棟がみつかり、集落中央部にも古代の遺構が分布していることが確認された。また、遺跡西側の土層展示館予定地の確認調査では平安時代の掘立柱建物柱穴４基を確認した。

平成 11 年度の調査では、遺跡南側の平坦面で竪穴建物１棟、土坑５基、ピット 12 基を検出した。このうち奈良時代の遺構は竪穴建物 SI01 と土坑 SK02 である。SK02 からは鉄滓 28,334g と炉壁・羽口、被熱によって割れた石が多く出土した。出土した鉄滓は分析で原料に砂鉄を用いた製錬や精錬鍛冶に伴って発生したものであり、製鉄に関わる遺構の可能性も検討したが、底面の焼土等は検出されず鉄滓や被熱によって割れた石を廃棄した施設とし、周囲の存在の可能性を示唆した。今回の調査で検出された鍛冶遺構は 11 年度調査区の SI01 の西 25 mに位置し、台地南斜面で７世紀後半～９世紀中頃まで継続して鍛冶工房が営まれていたことが確認された。

北代遺跡周辺の古代の集落には、耕地の開発を進めた開墾集落とされる奈良～平安時代の長岡杉林遺跡・呉羽小竹堤遺跡・呉羽富田町遺跡などがあり、今回の調査で確認された掘立柱建物は当該期にあたる。SI01 の１期建物はそれに先行する７世紀後半～８世紀前半の時期であり、既往の調査で確認されている時期より早い段階から集落が営まれたことを示すものといえる。（近藤）



第 30 図　北代遺跡の古代の遺構

全体写真・南から

SK03・04 完掘

SX07・西から

SX03 出土状況・三角壇形土製品

SX03 出土状況・土偶足

SX03 出土状況・南から

SX04 セクション・西から

SX07（SK35）・西から

SX03・04 セクション・南北ベルト東から

SK12 セクション・下層東から

SK12 焼土下遺物出土状況・南東から

SK12 完掘・南から

P13、14 セクション・南東から

SI01（SK06・07） 1期建物・完掘状況

SK13 遺物出土状況・南から

SI01（SK06・07）2期建物貼床断面・東から

SI01（SK06・07）２期建物　完掘南西から

SK10 焼土、炭出土状況・南から

SK10 セクション・南から

P06 セクション・西から

SK08・SX06 セクション・東から

SK11 出土状況・南から

SK11 セクション・南から

SI01（SK06・07）セクション・北壁から

SB01（P42） 柱痕・南から

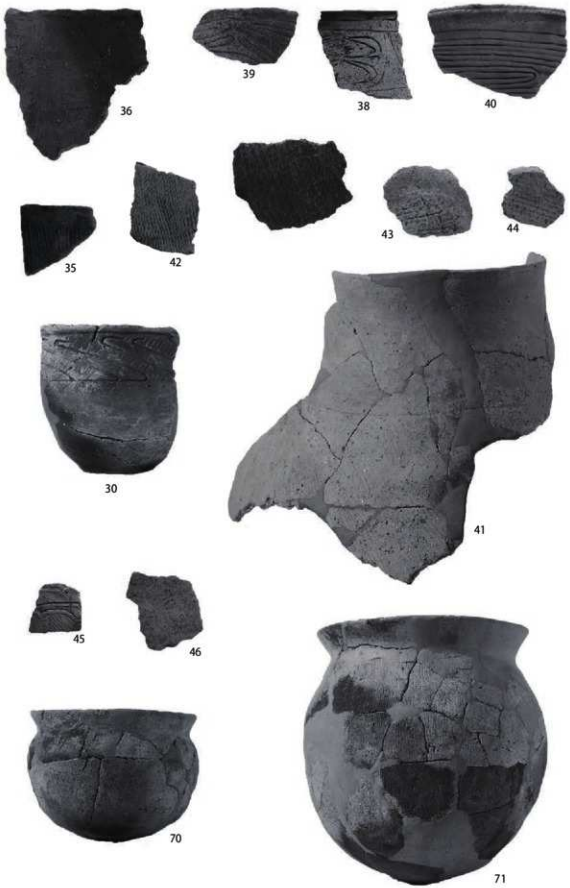
SB01（P42）完堀・西から

SB02（P15）セクション・南から

SB02（P16）セクション・南から

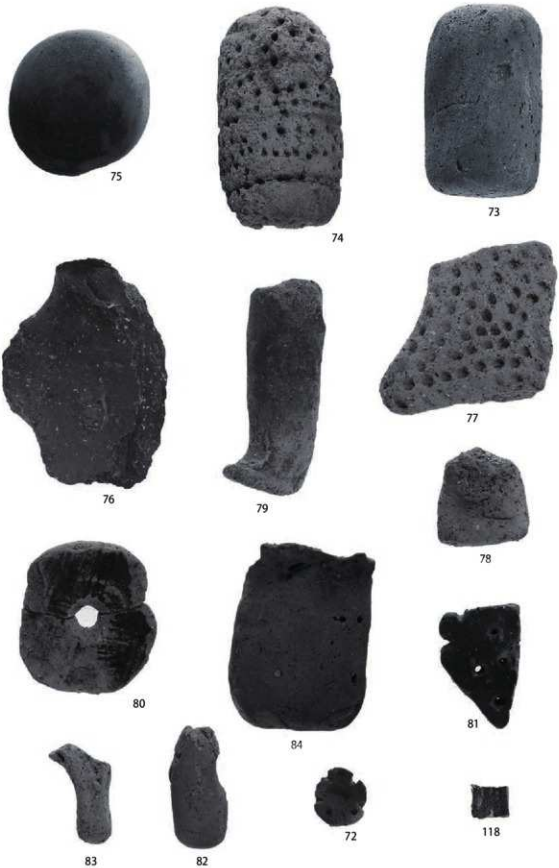
SB02（P17）セクション・南から

北代遺跡出土遺物（1）縄文土器

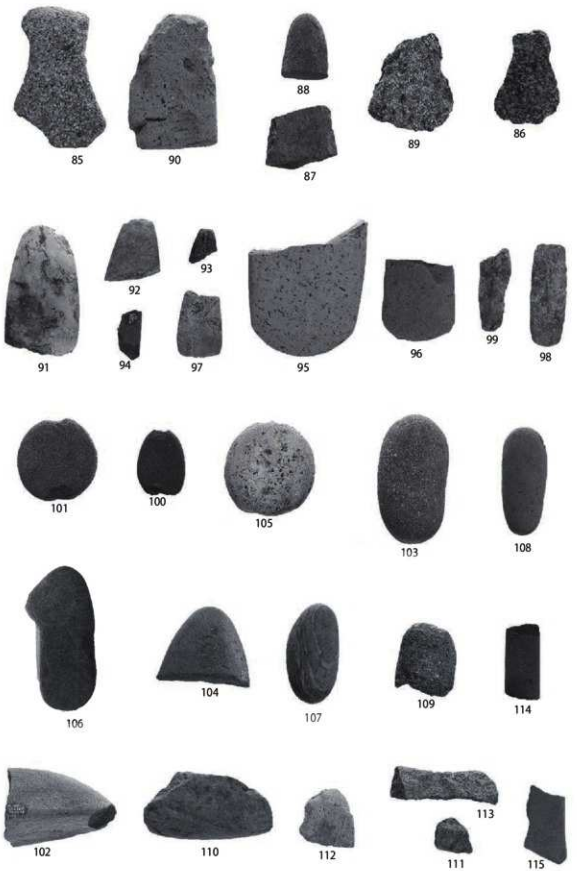


北代遺跡出土遺物(2) 縄文土器・弥生土器・土師器

北代遺跡出土遺物（3）須恵器・土師器



北代遺跡出土遺物（4） 土製品



北代遺跡出土遺物(5) 石器

第４章　呉羽富田町遺跡

第１節　調査の方法

発掘調査区は、個人住宅の基礎工事・下水道管路工事によって遺構面を超えて掘削される範囲である。調査区は、便宜上、西列・南列・東列・北列と分ける。

発掘作業　表土掘削はバックホウにより行い、排土は横置きした。表土掘削が完了した場所から、ジョレンで人力による遺構検出作業を行った。

遺構掘削は移植ゴテを使用した。基本的に半截して掘り下げ、必要に応じて断面図 1/20 作成と写真撮影を行い、その後完掘した。

第 31 図　呉羽富田町遺跡調査区位置図 (1/5,000)

測量作業　図化作業は株式会社エイ・テックに委託し、測量基準は世界測地系第Ⅶ系を使用した。全ての遺構掘削完了後に図化作業を行い、平面図（概略図 1/100、詳細図 1/40）を作成した。

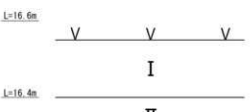
写真はフルサイズデジタル一眼レフカメラ（2493 万画素）を使用しで撮影した。

整理作業　整理作業は、発掘作業終了後に遺物洗浄と注記等の基礎整理を行った。遺構や表土からの出土遺物が大多数を占めるが、すべて破片である。遺跡の全容を把握できるよう、口縁部、底部が残るものを概ね図化した。図化後、遺物のトレースは株式会社エイ・テックに委託し、デジタルトレースで行った。遺物写真はフルサイズデジタル一眼レフカメラ（2493 万画素）を使用して撮影した。

第２節　層序（第 32 図）

調査地点の現標高は 16.5 ～ 16.6 m、遺構検出面は 16.0 ～ 16.3 mである。

基本層序は上層から順に、Ⅰ層：表土（耕作土、10YR2/3 黒褐色シルト質土）、Ⅱ層：10YR3/3 暗褐色シルト＋地山ブロック状混、Ⅲ層：地山（10YR5/8 黄褐色シルト～粘土）である。地山上面において、平安時代の遺構を確認した。地山は、後世の畑作で撹乱を受けており、遺構の残存状態は悪い。



第 32 図　呉羽富田町遺跡の基本層序

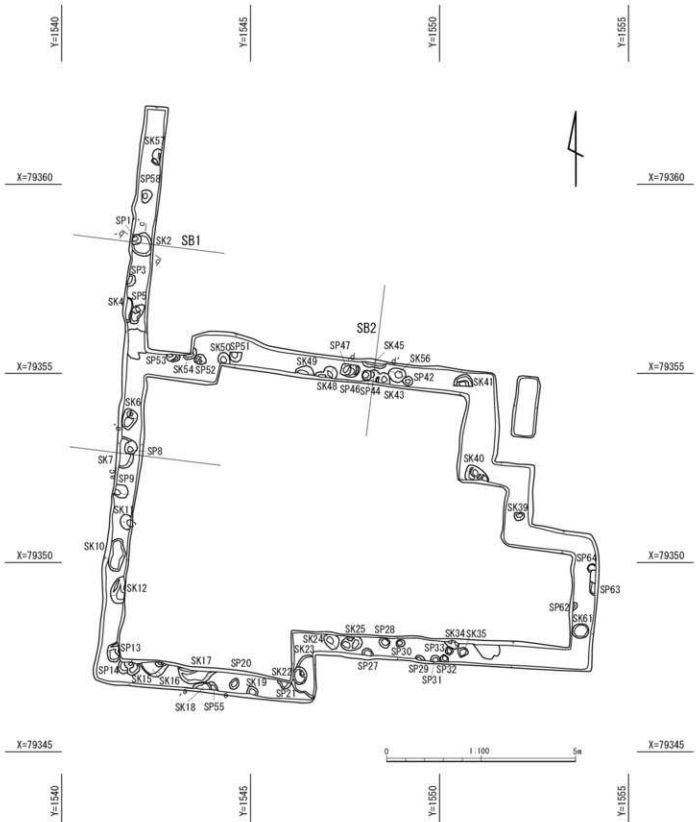
第３節　遺構

1　概　要

58 基の遺構をⅢ層上面で確認した。内訳は、掘立柱建物 (SB) 2 棟、土坑 (SK) 30 基、ピット (SP) 31 基を検出したが、土坑・ピットの多くは近現代の畑作による撹乱である。出土遺物から、主に 9 世紀後葉（平安時代前期）の遺構と考えられる。

2　掘立柱建物（第 33・34 図、写真図版 12・13）

SB1　調査区西列の北側から中央で、柱穴 2 基（SK2、SK7）を検出した。心心間の距離から梁行と考えられ、SB1 は東西方向に延びる側柱建物と推定される。柱穴の掘り方は平面隅丸方形で、底面はほぼ水平である。北側の柱穴 SK2 は、一辺 0.54 ～ 0.62 m、深さ 0.22 mを測る。SK2 から黒色土器埦、土師器長胴甕が出土した。南側の柱穴 SK7 は、一辺 0.80 m、深さ 0.20 mを測るが、

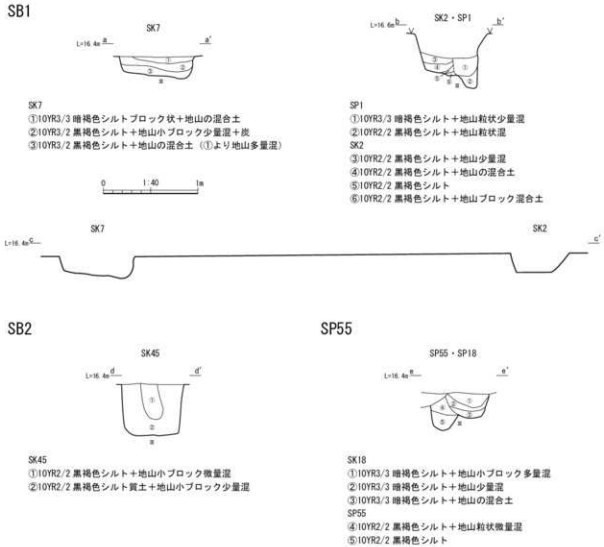


第 33 図　呉羽富田町遺跡遺構平面図 (1/100)

西側が調査区外であるため全体像は不明である。SK2より一回り大きい。SK2・SK7ともに柱痕は確認されない。SK2-SK7の心心間は梁行約5.5mであり、主軸方向はN-83°-W(N-7°-E)である。SK7から土師器長胴甕が出土した。遺物の年代から9世紀後葉と考えられる。

SB2　調査区北列中央で、柱穴1基（SK45）を検出した。柱穴の掘り方は平面隅丸方形で、底面はほぼ水平である。SK45は、一辺0.65m、深さ0.55mを測るが、北側が調査区外であるため全体像は不明である。断面に柱径0.18m程度の柱痕が確認できる。SK45からは須恵器甕、土師器埦・小型甕・長胴甕、土錘が出土した。遺物の年代から9世紀後葉と考えられる。

SP55　調査区の南列西側で検出した。掘立柱建物の柱穴である可能性がある。柱穴の掘り方は直径0.30mの円形であるが、南側が調査区外であるため全体像は不明である。深さ0.38mを測る。遺物は土師器埦・赤彩埦・皿・小型甕が出土した。遺物の年代から9世紀後葉と考えられる。土師器小型甕の内面に付着した炭化物で放射性炭素年代測定を行った結果、暦年較正年代（1σ）で821-885calADの値が得られた。遺構西側はSK18の撹乱を受けており、SK18の出土遺物はSP55の遺物である可能性がある。



第34図　呉羽富田町遺跡遺構断面図（1/40）

第4節　遺　物

1　概　要

出土遺物はコンテナケース4箱分である。土器はほとんどが破片であるため、口径、底径が復元できるものを中心に図化した。

なお、遺物の時期比定にあたっては主に次の文献を参考にした。古代土器：田嶋1988・森2006・池野2010・片山2015、土錘：細辻2001。

以下、遺構出土、表土出土に分けて遺物を記述する。

2　遺構出土遺物（第35・36図、写真図版15）

SK2(SB1)　1は黒色土器塊である。内面がミガキ調整され、黒色処理されている。

SK45(SB2)　2は須恵器甕の体部である。外面にタタキ目が施される。3は土師器塊の底部である。底部回転糸切りである。4は土錘である。細辻氏の分類では、樽型c類である。重さ152.4gを測る。

SP55　5～14は土師器である。5～11は塊である。5～7は口径11～14cmの中型、8・9は15～18cmの大型である。5･6･10は口縁部を上方に引き上げる。7～9は口縁部がやや外反する。10は赤彩塊である。内外面に赤彩が施される。11は塊の底部である。12・13は皿である。14は小型甕である。池野氏の分類では、B6類である。内面および体部外面下半に煤・炭化物が付着する。

SK18　15は土師器赤彩塊である。口縁部がやや外反する。内面に赤彩が施される。

SK22　16～18は土師器である。16は塊である。口縁部を上方に引き上げる。17は皿である。18は小型甕である。池野氏の分類では、A2類である。19は鉄滓である。重さ100gを測る。

SK23　20～22は土師器である。20は塊である。口縁部がやや外反する。21・22は甕である。池野氏の分類では、21はB2類、22はB1類である。

SK17　23・24は土師器赤彩塊の底部である。23は内外面とも丁寧な赤彩が施される。底部回転糸切りである。24は外面に赤彩が施される。底面外縁に高さ0.1cmの低い高台が貼り付けられている。

SK24　25・26は土師器である。25は塊である。26は皿である。

SP19　27・28は土師器塊の底部である。底部回転糸切りである。28は内外面に赤彩が施されている可能性がある。

SP21　29は土師器長胴甕である。池野氏の分類では、B5類である。

SP29　30は土師器塊である。口縁部を上方に引き上げる。

SP63　31は須恵器杯蓋である。天井部は回転ヘラケズリを行う。口縁端部は内面に折り返して、丸くおさめる。

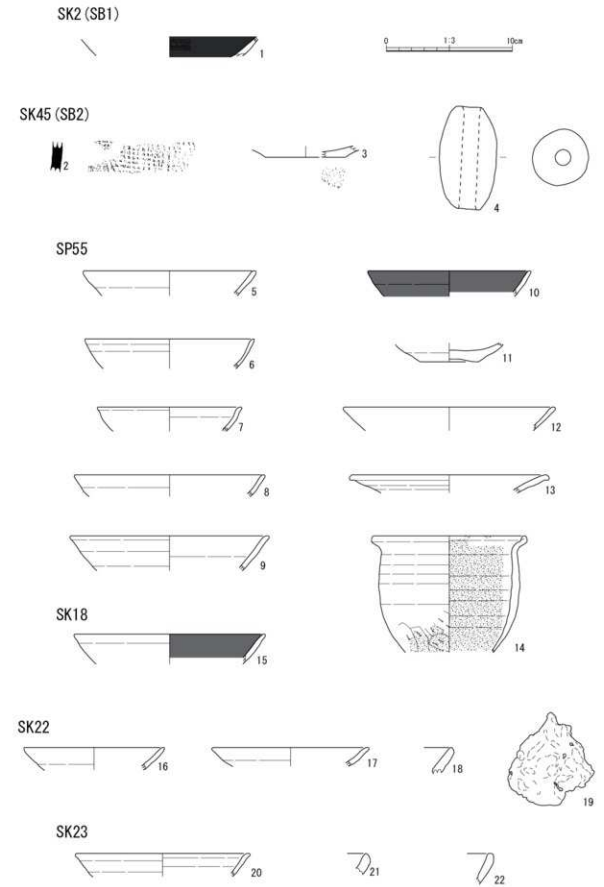
SP64　32は土師器長胴甕である。池野氏の分類では、B8類である。

3　表土出土遺物（第36図、写真図版14）

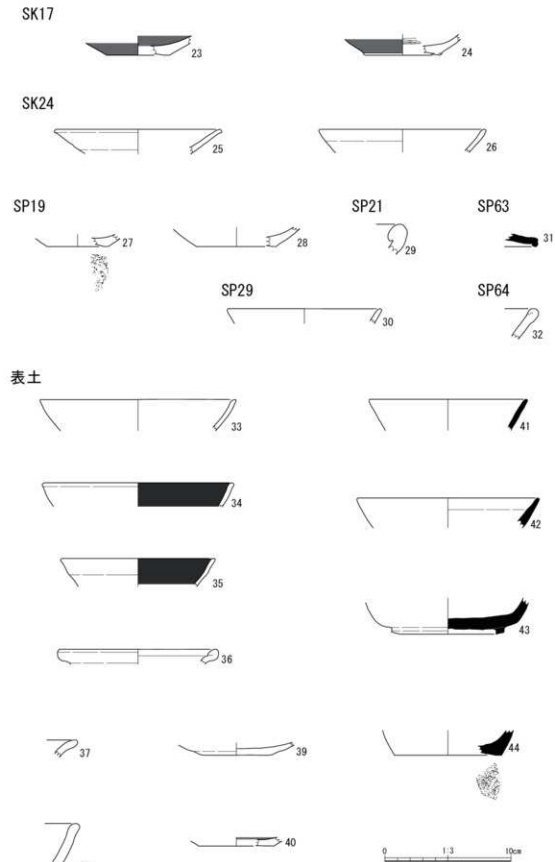
33・34は黒色土器塊である。内面をミガキ調整し、黒色処理されている。35～40は土師器である。35は塊である。36・37は小型甕である。池野氏の分類では、36はB6類、37はA3類である。38は鍋である。池野氏の分類では、C8類である。39は大型塊の底部である。底部ヘラケズリを行う。40は赤彩塊の底部である。内面はミガキ調整され、赤彩が施される。底部回転糸切りである。41～44は須恵器である。41・42は杯身である。口縁部が直線状に立ち上がる。43は杯Bである。底部と体部との境は丸い。底部ヘラ切り後ヘラケズリを行う。44は壺の底部である。底部ヘラ切り後ヘラケズリを行う。

第 10 表　呉羽富田町遺跡出土遺物観察表

No.	遺物	器形	遺構	口径（長さ）	器高（幅）	底径（厚さ）	胎土	焼成	色調	調整外面	調整内面	備考
1	土師器	坩（黒色）	SK2				密	良	（外）10YR4/2 灰黒褐 （内）10YR1.7/1 黒	ロクロナデ	ミガキ	内面黒色処理
2	須恵器	甕	SK45				密	不良	10YR8/4 浅黄橙	タタキ目		
3	土師器	坩	SK45		0.9	6.4	密	良	10YR8/2 灰白	ロクロナデ	ミガキ？	底部回転糸切り
4	土錘		SK45	8.0	4.5		密	良	10YR8/3 浅黄橙			樽型ｃ類 重さ 152.4g
5	土師器	坩	SP55	13.8	2.0		密	やや不良	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	土師器	坩	SP55	13.6	2.4		密	良	10YR4/4 褐	ロクロナデ	ミガキ	
7	土師器	坩	SP55	11.5	1.95		密	やや良	（外）10YR8/3 浅黄橙 （内）2.5Y4/1 黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	土師器	坩	SP55	15.2	1.7		密	良	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	土師器	坩	SP55	17.8	2.8		密	やや良	7.5YR8/6 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	土師器	坩（赤彩）	SP55	13.0	2.05		密	良	（胎土）10YR8/3 浅黄橙 （赤彩）5YR6/6 橙	ロクロナデ	ミガキ	内外面赤彩
11	土師器	坩	SP55		1.5	4.6	密	不良	5YR6/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	表面剥離 底部回転糸切り？
12	土師器	皿	SP55	16.8	1.9		密	やや不良	7.5YR7/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	土師器	皿	SP55	15.6	1.45		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
14	土師器	小型甕	SP55	12.0	9.35		密	やや良	5YR6/4 にぶい橙	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	B６類 内面・外面底部スス
15	土師器	坩（赤彩）	SK18	15.2	2.4		密	良	（外）10YR8/6 黄橙 （赤彩（内））5YR6/6 橙	ロクロナデ	細ミガキ ロクロナデ	内面赤彩
16	土師器	坩	SK22	11.2	1.8		密	やや良	10YR7/6 明黄褐 ～ 5YR7/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
17	土師器	皿	SK22	12.4	1.5		密	良	2.5Y5/3 黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
18	土師器	小型甕	SK22		2.1		密	やや不良	2.5Y8/3 浅黄	ナデ	ナデ	A２類
19	鉄滓		SK22									重さ 100ｇ
20	土師器	坩	SK23	13.8	1.85		密	良	10YR4/2 灰黄褐 ～ 3/2 黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
21	土師器	甕	SK23		1.7		密	やや良	10YR8/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	B２類
22	土師器	甕	SK23		2.4		密	やや良	10YR8/2 灰白	ナデ	ナデ	B１類
23	土師器	坩（赤彩）	SK17		1.55	5.0	密	良	（胎土）10YR8/4 浅黄橙 （赤彩）2.5YR4/6 赤褐	ロクロナデ	ミガキ	内外面赤彩 底部回転糸切り
24	土師器	坩（赤彩）	SK17		1.7	6.0	密	良	（胎土）10YR7/3 にぶい赤橙 （赤彩（外））5YR5/6 明赤褐	ロクロナデ	ミガキ	外面赤彩 低い貼付高台
25	土師器	坩	SK24	13.2	1.85		密	良	10YR4/3 にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
26	土師器	皿	SK24	13.1	2.0		密	良	5YR6/6 橙～ 10YR7/4 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
27	土師器	坩	SP19		0.95	5.0	密	やや良	7.5YR8/4 浅黄橙	ロクロナデ	細ミガキ ロクロナデ	底部回転糸切り
28	土師器	坩	SP19		1.55	6.4	密	やや良	5YR6/6 橙	ロクロナデ	細ミガキ ロクロナデ	底部回転糸切り
29	土師器	長頸壺	SP21		2.4		密	やや良	10YR8/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	B５類 外面にスス
30	土師器	坩	SP29	12.2	1.2		密	良	5YR7/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
31	須恵器	杯蓋	SP63				密	良	10YR6/1 褐灰	ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	
32	土師器	長頸壺	SP64				密	やや良	7.5YR8/6 浅黄橙	ナデ	ナデ	B８類
33	土師器	坩（黒色）	表土	15.0	1.9		密	良	（外）10YR8/4 浅黄橙 （内）10YR1.7/1 黒色	ロクロナデ	ミガキ	内面黒色処理
34	土師器	坩（黒色）	表土	12.2	2.2		密	良	（外）10YR6/4 にぶい黄橙 （内）10YR2/1 黒褐	ロクロナデ	ミガキ	内面黒色処理
35	土師器	坩	表土	15.6	2.5		密	やや良	7.5YR6/4 にぶい橙～ 10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
36	土師器	小型甕	表土	12.6	2.2					ナデ	ナデ	B６類
37	土師器	甕	表土		1.4		密	やや不良	7.5YR8/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	A３類
38	土師器	鍋	表土		3.7		密	良	10YR8/3 浅黄橙		ナデ	C８類
39	土師器	皿	表土		1.0	5.7	密	良	5YR6/6 橙	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
40	土師器	坩（赤彩）	表土		0.7	1.0				ロクロナデ	ミガキ	
41	須恵器	杯	表土	12.6	2.5		密	良	2.5Y6/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	
42	須恵器	杯	表土	14.4	2.4		密	やや良	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	
43	須恵器	杯Ｂ	表土		2.9	7.8	密	やや不良	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台 底部ヘラ切り後ヘラケズリ
44	須恵器	壺	表土		2.0	8.6	密	やや良	2.5Y6/2 灰黄～ 5Y4/2 灰オリーブ	ケズリ	ロクロナデ	底部ヘラ切り後ヘラヘズリ



第 35 図　呉羽富田町遺跡出土遺物実測図（1）



第 36 図　呉羽富田町遺跡出土遺物実測図 (2)

第５節　自然科学分析

呉羽富田町遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

呉羽富田町遺跡は、富山県富山市北代に所在する。測定対象試料は、掘立柱建物跡の柱穴から出土した土師器甕付着炭化物１点である（表 1）。試料となった付着物は土器の内面から採取された。ただし、付着物は薄く、黒味も薄いことから、通常炭化物に対して汚染を除去するために行うアルカリ処理を省略し、酸処理のみとした。

2　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、付着物、混入物を取り除く。
(2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用い、表１に「HCl」と記載する。
(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。
(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

(1) δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
(2) ^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
(3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1σ = 68.3%）あるいは 2 標準偏差（2σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラ

ムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCalv4.4 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料の 14C 年代は 1190 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 778 ～ 885cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は 2.7%という炭化物としては非常に低い値で、採取後の試料の色調は褐色と観察されていることから、測定された炭素の由来に注意を要する。

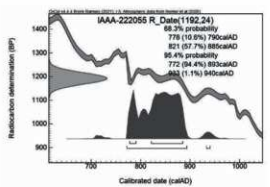


図 1　暦年較正年代グラフ

表 1　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-222055	試料 1	柱穴 SP55 出土土師器壺	土師器付着炭化物	HCl	-24.76 ± 0.26	1,190 ± 20	86.20 ± 0.26

［IAA 登録番号：#8826］

表 2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 14C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-222055	1,190 ± 20	86.24 ± 0.26	1,192 ± 24	778calAD-790calAD（10.6%） 821calAD-885calAD（57.7%）	772calAD-893calAD（94.4%） 933calAD-940calAD（1.1%）

［参考値］

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

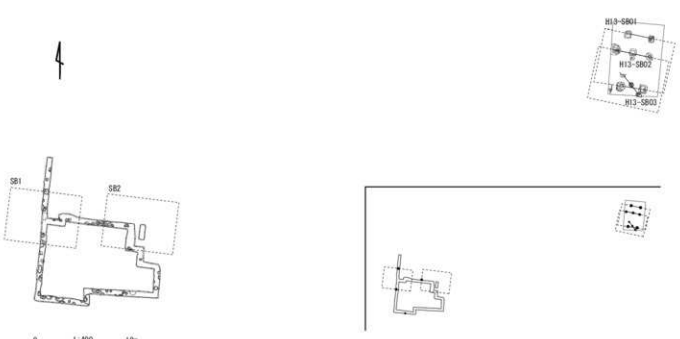
第6節　総　括

本調査区の東 50 mにある平成 13 年度調査区では、3 棟の掘立柱建物が検出されている。本遺跡で検出されている掘立柱建物は、以下のとおりである。

調査年度	遺構	建物形態	柱穴		桁行の心心間	梁行の心心間	建物の主軸方向
			形状	平面規模			
H13	SB01	側柱建物	隅丸方形	0.60 ～ 1.0 m	2.45 m	5.44 ～ 5.52 m	N-78 ～ 80° -W
	SB02		隅丸方形	0.65 ～ 0.90 m	1.8 m		N-79° -W
	SB03	柵？	円形	0.40 ～ 0.50 m	1.3 m		N-39° -W
R3	SB1		隅丸方形	0.54 ～ 0.80 m		5.5 m	N-83° -W(N- 7° -E)
	SB2	側柱建物	隅丸方形	0.65 m			

今回見つかった SB1 梁行の心心間は約 5.5 mである。H13-SB01 梁行の心心間は 5.44 ～ 5.52 mであり、SB1 とほぼ同じである。また、北側の柱穴 SK2 より南側の柱穴 SK7 の平面規模が大きく、これは北側桁行より南側桁行の柱穴が一回り大きいと報告された H13-SB01 と同様の傾向が見られる。SB1 と H13-SB01 はほぼ同規模の側柱建物と考えられる。

掘立柱建物の構築年代は、出土した須恵器・土師器の編年から 9 世紀後葉に比定される。P55 出土土師器の放射性炭素年代測定を行った結果、暦年較正年代（1 σ）で 821-885calAD の値が得られ、編年の年代観と齟齬はない。平成 13 年度調査で掘立柱建物の構築年代を 9 世紀中葉以降の年代を想定しており、今回の調査区と同時期に当たる。このことから、9 世紀後葉に本遺跡北東部周辺には掘立柱建物が群を成していたと考えられる。（堀内）



第 37 図　平成 13 年度調査区と令和 3 年度調査区全体図

西列（北から）

北列（東から）

南列（東から）

東列（南から）

掘立柱建物 SB1・SB2（南から）

SK2(SB1)・SP1 完掘（北から）

SK2(SB1)・SP1 断面（北東から）

SK7(SB1) 完掘（東から）

SP55・SK18 断面（北から）

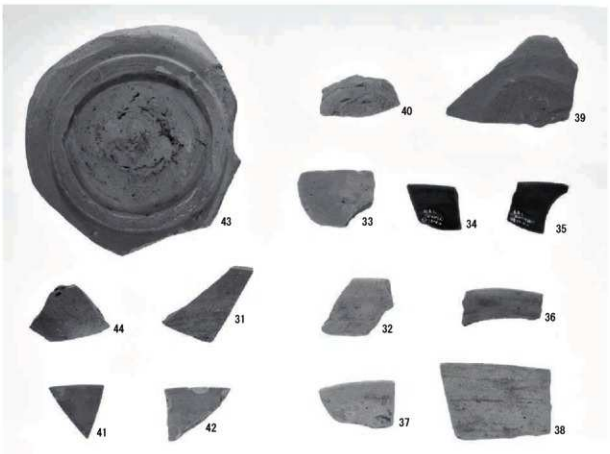
SK45(SB2) 断面（南から）

SK45(SB2) 土錘出土状況（南から）

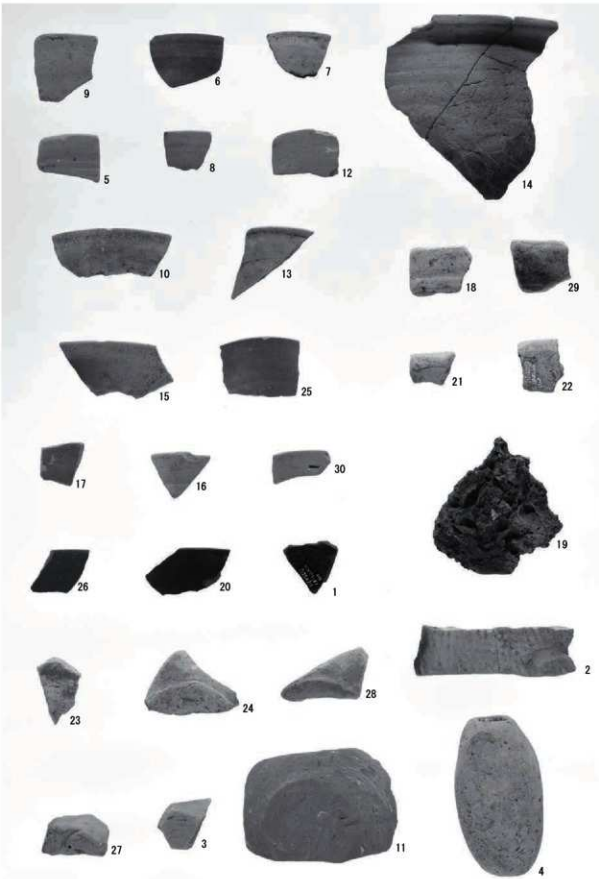
SK22 断面（南から）

SP24 断面（南から）

調査区遠景（南東から）



表土出土遺物


9
6
7
14
5
8
12
10
13
18
29
15
25
21
22
17
16
30
19
26
20
1
2
23
24
28
27
3
11
4

遺構出土遺物

池野正男 1988「越中における須恵器生産の概要」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

池野正男 2010「ロクロ土師器煮炊具の生産と流通」『大境』第 28 号　富山考古学会

石川県立埋蔵文化財センター 1989『金沢市米泉遺跡』

内田亜紀子 2000「越中婦負郡の古代土師器煮炊具－婦中町中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の竪穴住居出土資料を中心に－」『富山考古学研究』第 3 号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

及川良彦・山本孝司 2001「土器作りのムラと粘土採掘場　－多摩ニュータウンNo.245 遺跡とNo.248 遺跡の関係－」『日本考古学』第 11 号

片山博道 2015「越中における須恵器生産の研究」『大境』第 34 号　富山考古学会

小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

国土交通省 2018『土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書　富山 5 万分の 1』

設楽博己 2007「長野県域の再葬」『縄文時代の考古学 9　死と弔い　葬制』同成社

関清 1988「越中における古代前半の土師器」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定－加賀に見る 7 世紀から 11 世紀中頃にかけての土器群の推移」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15 年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第 33 号　富山市日本海文化研究所

財団法人東京都埋蔵文化財センター 1982『多摩ニュータウン遺跡 昭和 56 年度』第 1 分冊

財団法人東京都埋蔵文化財センター 1998『多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告』

財団法人東京都埋蔵文化財センター 2000『多摩ニュータウン遺跡 No247・248 遺跡』

富山県教育委員会 1972「第Ⅲ部　富山市小竹貝塚遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

富山県教育委員会 1991『北陸自動車道遺跡調査報告　－朝日町編 6 －境A遺跡土器編－』

富山県教育委員会 1992『北陸自動車道遺跡調査報告　－朝日町編 7 －境A遺跡総括編－』

富山県富山農林振興センター・富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004『富山県射水郡小杉町黒河尺目遺跡　黒河中老田遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笠川遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2010『平成 21 年度埋蔵文化財年報』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2011『平成 22 年度埋蔵文化財年報』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014『小竹貝塚発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2019『布尻遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター 1994『吉倉B遺跡』

富山市教育委員会 1974『富山市小竹貝塚範囲確認調査報告書』

富山市教育委員会 1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 1979『北代遺跡試掘調査報告書』

富山市教育委員会 1980『今市遺跡・北代遺跡』

富山市教育委員会 1981『北代遺跡』

富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』

富山市教育委員会 1997『史跡北代遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1998『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ』
富山市教育委員会 1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』
富山市教育委員会 2022『吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003a『北代西山Ⅱ遺跡・茶屋町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003b『長岡八町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2004『北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
富山市教育委員会 2012a『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』
富山市教育委員会 2012b『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2013『富山市今市遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅺ　－北代村巻Ⅴ遺跡 友坂遺跡 吉作遺跡－』
富山市教育委員会 2017『富山市北代縄文広場復元建物等再整備事業報告書』
富山市教育委員会 2020『富山市番神山古墳・番神山横穴墓群発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2022『富山市番神山横穴墓群・呉羽山古墳群発掘調査報告書』
財団法人長野県埋蔵文化財センター 1997「飯田古屋敷遺跡・玄照寺後・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』
財団法人長野県埋蔵文化財センター 2013「沢田鍋土遺跡　立ヶ花表遺跡　立ヶ花城跡」『北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書7』
西井龍儀・小林高範 1976「呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号　富山考古学会
西井龍儀・小林高範 2005「呉羽山古道の調査」『大境』第25号　富山考古学会
町田賢一 2019「富山県における縄文時代墓制の諸様相」『列島における縄文時代の諸様相』縄文時代文化研究会
真脇遺跡発掘調査団編 1986『真脇遺跡』
藤田慎一 2013「富山県内出土の天王山式土器から見た越後、東北との交流」『大境』第32号　富山考古学会
古川知明・野垣好史・小林高太・蓮沼優介 2010「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第29号　富山市考古資料館
文化財保護委員会 1965『全国遺跡地図（富山県）』
細辻真澄 2001「任海宮田遺跡出土の土錘について」『富山考古学研究　紀要』第4号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
細辻嘉門 2022「富山市内の天王山系土器について」『富山市考古資料館紀要』第41号　富山市考古資料館
堀沢祐一 1996「北代加茂下Ⅲ遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』№.30　富山市考古資料館
堀沢祐一 1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察　－北代加茂下Ⅲ遺跡掘立柱建物の検討－」『富山市考古資料館紀要』第16号　富山市考古資料館
堀沢祐一 2022「土製耳飾考」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報　富山市の遺跡物語』第23号　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	とやましないせきはっくつちょうさがいよう23
書名	富山市内遺跡発掘調査概要23
副書名	北代遺跡　呉羽富田町遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	110
編著者名	近藤顕子・堀内大介・納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）、株式会社加速器研究所
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒939-2798　富山県富山市婦中町速星754　℡076-465-2146
発行年月日	2023年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北代遺跡	富山市北代字大畑	16201	2010207	36度43分02秒	137度11分09秒	20030225～20030331	169	個人住宅建築
呉羽富田町遺跡	富山市北代字伊佐波	16201	2010160	36度42分50秒	137度10分50秒	20220309～20220318	42	個人住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北代遺跡	集落	縄文	粘土採掘坑・墓または祭祀遺構・土坑・ピット	縄文土器、耳飾、三角壔形土製品、有孔球状土製品、土冠、土偶、打製石斧、磨製石斧、石錘、凹石、叩石、擦切石器、筋砥石、砥石、石刀、剥片	粘土採掘坑を6群検出した
		弥生	溝なし	弥生土器	
		古代	掘立柱建物、竪穴建物、溝・土坑・ピット	土師器、須恵器、紡錘車・土錘、鉄滓	掘立柱建物と竪穴建物を検出した
呉羽富田町遺跡	集落	平安	掘立柱建物、土坑	土師器、須恵器、土錘、鉄滓	掘立柱建物の柱穴を検出した

要約

北代遺跡

北代遺跡は、北代台地に立地する。呉羽丘陵一帯は旧石器時代から近世までの長い間、居住・墓、生産など各種の遺跡が形成された。

調査では、縄文時代の粘土採掘坑6群・墓または祭祀遺構1基・土坑5基・ピットと、古代の掘立柱建物、竪穴建物、溝・土坑・ピットを検出した。

縄文時代中～晩期の粘土採掘坑は複数の土坑が重複したもので、6群をなす。調査区中央の斜面部で確認された。当該期の集落が台地平坦面で確認されており、粘土採掘坑が集落の縁辺に位置する事例である。

古代の竪穴建物は7世紀後半～9世紀中頃までの3期にわたって営まれる。建物内には炉跡があり、焼土や焼土塊、炭化物や大量の鉄滓が出土したことから鍛冶工房と考えられる。北代遺跡ではこれまでの調査で古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、鍛冶炉等が検出されている。今回の調査で確認された遺構を含めて、精錬鍛冶などの製鉄作業が行われていた奈良・平安時代の開墾集落と考えられる。

呉羽富田町遺跡

呉羽富田町遺跡で、掘立柱建物2棟・ピットを検出した。建物は9世紀後葉である。近隣の平成13年度調査でも掘立柱建物3棟を検出しており、遺跡北東部周辺には掘立柱建物が群を成していたと考えられる。

富山市埋蔵文化財調査報告 110

富山市内遺跡発掘調査概要 23

－北代遺跡　呉羽富田町遺跡－

2023(令和 5)年 3 月 31 日　発行

発　行　富山市教育委員会
編　集　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒939-2798　富山県富山市婦中町速星 754
TEL:076-465-2146　FAX:076-465-5032
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中央印刷株式会社